
Devil May Cry ～蒼い悪魔と狂戦士～

幻痛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devil May Cry 〜蒼い悪魔と狂戦士〜

【Nコード】

N0187M

【作者名】

幻痛

【あらすじ】

蒼い剣士は魔界へと堕ちた。しかし、そこは魔界ではなく、別の世界だった。

第一話 流入（前書き）

ベルセルクとDMC3のクロス作品です。

※この作品は他サイトの「Arcadia」でも投稿中の作品です。作者は同一人物なのであしからず。タイトル変更してみました。厳しい感想、ご指摘大歓迎。

第一話 流入

紅い世界。

人の顔のようなものがユラユラと揺れながら空を覆い、黒い太陽が浮かんでいる。

地は”人の顔”が敷き詰められ、それぞれが生きているように表情を変えていた。

その空間の中央、無数の触手に拘束された褐色の肌を持つ女性の元に、剣を携えた大柄な男が駆ける。

その剥き出しの上半身は無数の傷が刻まれ、手には無骨な剣を握っていた。

頭からブーツの先まで血にまみれた男、ガッツは叫び声のような雄叫びを上げながら囚われの女性、最愛の人であるキャスカの前に群がる異形の存在の群に突っ込む。

人を丸飲みに来るほどの大きさの口に、刀剣のような鋭い歯を持つ異形達が餌に群がる獣のようにガッツに殺到した。

ガッツは正面から迫る異形に上段から剣を振り下ろし、口を四つに斬り裂く。足を止めず駆け抜けけると、彼の居た場所を他の異形の牙が抉った。

左右から襲いかかる巨大な手を渾身の力を込めた薙ぎ払いで指を切りとばす事で防ぐ。

ただ数歩の距離を進むのに何度もの死線をさまよい、新たな死線を潜り抜ける。

まさに奇跡と言えるような事であった。

だが、あと少しという距離で左腕に異形の牙が食い込み、その奇跡も終わる。

牙はガッツを離さんとさらに食い込み、骨を削った。

そんな彼の遙か頭上、キャスカの背後に巨大な人の腕のような物が塔のようにそびえている。そこには四つの影が居た。

塔の親指の上に乗る人型の一人は、頭部のほとんどを占めるような巨大な脳を露出させ、瞼を縫い合わせ、鼻と口の皮膚はひっくり返して留められている。そして黒く光沢のある外套のようなもので肩から足下までを覆っていた。

中指に立っているのは裸の女性だ。その髪は一本一本が太い触手のような物が生えており、首とウエストを一人目と同じような光沢のある黒いもので覆っている。

薬指に”浮遊”している毛髪の生えていない小さな頭部と体の男。全長は頭二つ分のサイズしかなく、目にはサングラスのように黒い目が埋め込まれるように付いている。

小指には巨大な”ウミウシ”に頭部が乗っているような男がいる。その顔には肉が付き、鼻はつぶれて豚のように醜い。

そのうち、親指にたたずむ人型が語り出す。

『誕生だ……五人目の福王。新たな魔王。ボイド、スラン、ユービック、コンラッド。我らに連なりし、魔名を冠する新しき眷属。闇の翼フェムト』

塔の手のひら、くぼんだ地点に貯まった赤い血の池から新たな人型が生える。

塔はそれに答えるように、握られていた手を開き始める。そして、生まれた人型は翼を広げ、キャスカの元へと舞い降りた。

ガッツの目が見開かれる。

「……グリ、フィス……？」

それは、ガッツ達が所属していた傭兵団”鷹の団”団長、グリフィスの変わり果てた姿であった。

それが現れると、あれほど無秩序に暴れ回っていた化け物達がシンと静まり返る。

グリフィスの元にキャスカが運ばれ、彼はその体を撫で回した。

ガッツの目の前で。

はじめは理解出来なかった。だが、”何”をしようとしているのかに気づくと、怒りが彼を埋め尽くした。

駆け出そうと足に力を入れるが、噛みつかれた左腕が足かせとなつて出来ない。

すぐさま噛みついた化け物に剣を突き立てる。酷使された剣は一突きで剣先が欠け、渾身の力で叩きつけ続けると半ばから折れた。

そして、迷いもなく、折れた剣を“己の左腕”に突き立てる。

折れた剣は切るといふよりは潰すという形でガッツの左腕を壊し始める。

鍛え上げられた腕は筋繊維がズタズタになるまで数回に分けて叩き潰され、骨が露出した。

それに向かって更に剣を突き刺す。

骨が完全に折れ、残った皮と何本かの筋が残った腕を引っ張る。

ブチブチと音をたてて、左腕が切り離される。

激痛が彼を埋め尽すが、怒りがそれを塗り変えた。

「グリフィス!!!!」

かつての親友の名を呼び、数歩だけ近づく。だが、周囲の異形はそれを見過ごさなかった。

無数の手が、足がガッツを地面に押しつける。衝撃で跳ね上がった頭も押さえつけられ、叫ぶ事も妨げられた。

人面に押さえつけられながら、ガッツは見た。

最愛が親友に蹂躪されるのを、頭を押さえ込む異形の爪が右目を挟むまで。

○○○○○○

深く、深く、墜ちて行く。

上下が反転した足下、伸びていた光は指先ほどにしか見えなくなり、落下する先の闇がより深くなるのをバージルは感じた。

母の形見である金色のアミュレットと握り締め、自らが落ち行く深遠の闇を睥む。

悪魔と人間の息子、半人半魔である双子の弟、ダンテと切り結び、敗れ、父である“悪魔スパイダ”の形見である大剣フォースエッジを失うこととなったが、念願の魔界への入り口を開くことが出来た。盛大な殺し合いという名の兄弟喧嘩の末、体には深い傷が刻まれ、失う物も多くあった。

だが、幼き頃からの愛刀である日本刀”閻魔刀”とアミュレットもある。

落ち行く先、魔界は悪魔どもの巢窟だろうが、閻魔刀があれば十分だと、バージルは判断した。

やがて、永遠とも思える深遠の奥に光が見えた。黒い円を縁取るように漏れる光は、蓋のようにも見える。

あれが終点か。

バージルが思ったそのとき、彼の視界の隅に影が見えた。

その姿は異様の一言であった。それは馬にまたがった髑髏の騎士。手には薔薇の描かれた簡素な盾と、それに納められた持ち手に薔薇の棘のようなものがある剣を持っている。

その馬も、骸骨を模した馬鎧を身につけ、足場の無い闇を蹴りながら走る。

髑髏の騎士はバージルを一瞥するように、頭蓋骨の目の部分から覗く光を発した。

『これは——随分と長い間、待たされたモノだ……』

「何？」

それだけいうと、髑髏の騎士はバージルよりも前に進みだし、黒円を見据えると盾から剣を抜き、それを叩き壊した。

ガラスが割れるような音を響かせながら、黒円が割れ、そこから漏れる光に騎士は飛び込んで行く。それに続くように、バージルも光へと飛び込んだ。

○○○○○○

むせ返るような血の臭いが立ちこめる空間。

その中で、異形の生き物達に取り押さえられた男、ガッツは怒り狂っていた。

自らの夢のためだけに仲間を生贄にしたグリフィスに。その存在に触れることも出来ず、異形達に取り押さえられ、左腕を失い、仲間以上の存在であったキャスカを目の前で犯され、己の右目を潰され叫ぶことしか出来ない自分に。

俺にもっと力があれば、そう思っていたとき、”奇妙な乱入者”は現れた。

ガッツはその内の一人に見覚えがあった。

彼の所属していた“鷹の団”を抜けたとき、野宿をしていた森の中で見た髑髏の騎士である。

そしてもう一人、白に近い銀髪に細く長い、やや反りのある長剣を持った蒼い服の男。

髑髏の騎士は脳の露出した化け物、ボイドに斬りかかり、蒼い男は落下した先にいた異形を斬り裂いた。

騎士の振り下ろした剣はボイドの脳天を斬り裂く寸前、突如として出現した”壺”に飲み込まれる。吸い込まれた剣先は主である騎士に向かって飛び出した。

振られた剣がそのままの勢いで返ってくる。それを髑髏の騎士は

盾を使って防いだ。不意打ちに近いそれを防ぐ事が出来たのは、騎士の技量か故か、“はじめから”そういう攻撃が来ると知っていたのか。

それを見届けると同時に、体中を埋め尽くしていた痛みがガッツを襲い、彼の意識は闇へと沈んだ。

○○○○○○

光の先には広い空間が広がっていた。

人の顔のようなものが地面や壁、天井を多い尽くすそれは、現実界とは似ても似つかない光景であった。

そして、群がるようにして集っている異形の集団が見える。人間のように四肢のあるモノもいれば、芋虫のような胴体のモノ、コウモリのような翼を持つモノなど、生命として”歪んだ”生き物が揃っていた。

(悪魔――?)

目指す世界にいるはずの生き物と結びつけようとするバージルは、妙な違和感を覚えていた。

落ちた先にいた異形の一匹を頭から真ッ二つにする。両断された死体の間にたつように着地し、思考を続ける。バージルは疑問に思っていた。

髑髏の騎士もそうだが、鼻を突く血の匂いに。

血の匂いは人間のものだ。悪魔のそれとは違うことはバージルには分かっていた。血の匂いの濃さから察するに、一人や二人の量ではない。大量の血の匂いは数十人、あるいは数百の人間が魔界にいたことを示していた。

魔界に人間はいないはずだ。それにこれだけの悪魔どもが一同に返すのも疑問である。

死体に立ってそのように考えていると、いきなりの乱入者に呆けていた周りの異形が襲い掛かってくる。

思考をやめ、閻魔刀の鯉口を切る。

向かってくる2メートルほど大きさの異形を見据える。襲い掛かってくる長い鍵爪による一撃を身を沈めることで躲す。

そのまま四本の足を払い宙に浮かす。頭と足の位置が逆転したところを胴から切り裂き、二つに分かれた上半身を近くにいた象ほどの大きさにある異形に蹴りつけて視界を塞ぐ。

視界を塞がれて動きの止まった異形の背後に転移し、股下から切り上げる。ただの一撃で絶命した異形の血を浴びながら、ゆるりと納刀する。

振り返った先にいる異形達は、一瞬でやられた異形たちに呆気にとられているのか動かない。

その隙を逃さず高速で異形の群に突進し、勢いを殺さずに閻魔刀を抜き、振るう。

大小様々な異形は首、腕、足を宙に舞わせながら絶命していく。走り抜けた跡に倒れ付す死体を見ることもせず背面にて納刀する。髪から垂れる異形の赤い血を整髪剤代わりに、右手で前から後ろに撫で付けオールバックに整える。

未だ視界に蠢く異形を眺めながら、呟く。

「想像していたのとは違うが……まあいい。戦う相手には不自由しないだろう」

蒼い悪魔が舞台上上がる。

四方から飛びかかる異形を、一歩だけ前に歩むことでかわす。対象を見失った爪や牙が虚しく空を切った。

襲撃に失敗した一匹が腕から生えた一角獣のような角をバールに向けて突く。頭部を狙ったそれを閻魔刀の鞘で押し上げて穂先をずらし、抜いた刃で根元から切り落とした。

切り落とされた角を鞘で操り、その鋭い先端を持ち主に向ける。逆手に持ち替えた閻魔刀の柄を平たくなった根元にぶつけるようにして押し込む。凄まじい臂力と共に押し出された角は砲弾のように飛び、異形を貫いて背後にいたもう一匹にも突き刺さり、その身体を吹き飛ばした。

残った二体は長大な腕を振るい、挟むようにしてバージルを襲う。一方のそれを鞘で弾くようにして受け流し、もう一方は避けきれぬと判断して受け止めた。

「グッ……！」

衝撃がバージルを襲う。本来ならば余裕を持って受け止められる一撃であったが、彼の身体はダンテとの死闘の末に傷だらけであり、些細な衝撃が身体の本を揺さぶって痛みを発した。

歯を食いしばって苦痛をこらえ、刀をふるって異形の首を飛ばす。背後から迫っていた最後の一匹は振り返ることなく切り捨てた。

（やはり……まだ回復しきってはいないか——）

納刀し、周囲を遠巻きに囲んで襲い掛かるのを躊躇している異形の群れを睨め付ける。

（だが、この程度であれば問題は無い）

足元に転がる肉片は数百に上るだろう。弱った身体のことを考え、直接受けることをしなければ敗れることはないと判断した。

ふと悪魔どもの頭上に影が奔るのを見た。先ほど見かけた髑髏の騎士だ。

髑髏の騎士が跨る髑髏の装具をまとった馬は、重力を無視するように悪魔どもの頭上を飛び回る。

それに襲い掛かる羽をもつ異形たちが髑髏の騎士に襲い掛かるが、騎士がマントを翻した瞬間に切り刻まれる。

その先にいた巨大な化け物は巨大な手で叩き落とそうとするが、馬が宙で回転し、騎士が逆さまになったところでその腕ごと切り裂いて上半身を二つに割った。

そのままの勢いで駆け抜けた騎士は、群のなかにいた人間とほぼ

同じ外見を持つ黒衣の存在に切りかかる。

だが不意に騎士が上に飛んだと思うと、騎士がいた空間が歪み、圧縮される。

周囲にいた異形を巻き込みながら縮まっていく肉塊。それは黒衣の存在の力だろう。当の本人は右手を見ながら何か思考に耽っている。

その悪魔の後ろに飛んだ髑髏の騎士の馬には、いつのまにか二人の人影が乗りかかっていた。褐色の肌を持つ女性と、体格の良い身体に左腕の無い男だ。その身体は傷だらけで血にまみれている。

髑髏の騎士はそのまま空に飛び、落ちてきた穴へと戻っていった。それを見て、この場に来る直前の問答を思い出す。

髑髏の騎士は自分の存在を知っているような口ぶりであった。

「奴は、俺のことを知っていた……」

『そうなの——私も、あなたの事を知りたいわ……』

背後からささやく声に、バージルは閻魔刀を抜く。

振り向きざまに空間を斬り裂く。

しかし、そこには声の主は居らず、代わりに無数の異形の血しぶきが舞った。

『“王さま”は行ってしまったけれど、あなたはまだ居てくれるわよね?』

バージルを見下ろすように、翼手を広げて空に浮かぶ女性、スランが妖艶な笑みを浮かべていた。

第二話 洗礼

広大な平原。

そこには黒い竜巻のような“渦”が壁のように存在している。渦は大きく、町を飲み込むほどであった。

その渦の近くに、ガッツとキャスカの身体が並べられている。傍には少年のように幼い容姿の青年がいた。

その青年は傷だらけの二人に光る粉のようなものを擦り込んでいる。

そして、その集団を睨みつけるように、異形の存在が二つ、佇んでいた。

一つは、二人を“蝕”から連れ出した髑髏の騎士。もう一方は騎士の背後に仁王立ちをしている存在。

人型である“それ”の背丈はガッツの数倍はある。全身を黒色の剛毛で多い、獅子のような面構えの頭部には太く曲がった角が一对生えていた。蹄に似た足を持ち、臀部からは長い尻尾が生えている。硬い剛毛の下は筋肉は盛り上がり、人間ならば腕の一振りでその四肢を散らすだろう。

『構うな、続けよ』

手当てを続ける青年、ガッツたちと同じ“鷹の団”に所属しているリッケルトに髑髏の騎士が言った。その視線は背後の異形、“不死のゾッド”に向けられている。

『この程度で決着がついたなどと、考えてはいまいな』

ゾッドの口から低い声が響く。それは人間に獣としての恐怖を覚えさせるほどに威圧的であった。

『まさかな……だが不死者よ。この勝負、預ける気はないか？』

臨戦態勢であったゾッドに対し、騎士は勝負の見送りを提案する。

『何をバカな——』

強者との戦いを欲するゾッドが頷くはずは無かったが、倒れ付す

ガッツを見て驚きの声を上げた。

『その男は……生き延びたというのか、あの触から！？』

くぐもった笑い声をあげて、ゾッドは実に楽しそうに笑った。

『面白い、よからう。この勝負預けておこう。その男の強運に免じてな。——いや、凶運と言うべきか……だが忘れるな、貴様との勝敗、これで決したわけではないぞ！！』

興に入るゾッドは騎士の申し入れを受けた。

『さあ、急ぐがいい。門が消えれば、やつらがなだれ出てくるぞ』

殺戮の宴が終わろうとしている渦を見て続ける。“生贄”を食い散らす“使徒”の多くはゾッドほど“誇り”を持つものは少ない。

髑髏の騎士は手当てを続けるリッケルトに言葉をかける。

『終わったか』

「まだです。傷が多くて……」

リッケルトが賢明な治療を続けるが、ガッツとキャスカの傷は多く、しばらく時間がかかる様子であった。

ならばと、髑髏の騎士は傍に控えていた愛馬に跨った。

『どうした』

『しばしまて、古き友との約束。果たす必要があるのぞな』

ゾッドの疑問に答え、騎士は再び渦へと駆けた。

残された三人と一匹。リッケルトは治療に専念することで、ゾッドと目を合わせないように努めた。

そんな彼をよそに、ゾッドの視線は気を失ったガッツに釘付けであった。

（あの触を生き延びただと……面白い。見せてもらおう。これから、お前の前に広がる夜の世界。亡者の荒野の中で、人の身にすぎぬお前がどうあがくかを——”烙印の剣士”よ）

○○○○○○

異形が取り囲む中、バージルを見下ろす様に翼手を羽ばたかせるスラン。彼女はバージルの顔をよくよく見て、言葉を紡ぐ。

『——何処かでお会いしたかしら？』

「貴様なぞ知らん」

剣を納め、スランに向き直るバージル。剣を納めたのは戦闘の意思がないという事ではなく、“居合い”による一撃必殺の構えである。

『そうね……こんなに良い男、私が忘れるはずも無いでしょうし』

「貴様は話を通じるようだな。答えろ、“此処は何”だ？」

銃の撃鉄をあげるように、左手に握る閻魔刀の唾に親指をかける。それを見て、スランは笑みを浮かべながら口を開いた。

『“触”よ。人と魔の境界。時の接合点』

「——魔界への道は何処だ」

魔界、というフレーズを聞いたスランの表情が変わる。楽しむような笑みは鳴りをひそめ、虚を突かれたような顔になった。

だが、合点が行ったのか、すぐに妖艶な笑みを浮かべた。

『魔界ね……あなた、“彼”の知り合い？』

「質問に答えろ。魔界への道は何処だ」

バージルは指で唾を押し、一寸ほど閻魔刀の刃を抜く。

『さあ——私に触れることが出来たら、教えてあげるわ』

スランのコウモリのそれとよく似た翼手が動く。それは常人には見ることは叶わないほどに速く、バージルに襲いかかった。

だが、彼は“普通”ではない。

スランの翼手が動くのとほぼ同時に、バージルは床の人面が抉れるほど強く踏み込む。人面は裂け、血飛沫と叫び声を上げた。

神速で抜かれた刃がスランの翼手から伸びる鉤爪が触れあって火花を散らせる。

拮抗した両者は、互いに弾かれるように距離をとり、バージルは納刀をして口を開く。

「腕の一本でも失えば、その口も開くだろう」

バージルの周囲に浅葱色の光が集う。それは徐々に形を成し、やがて光る両刃の剣へと形を変えた。

彼の魔力で構成された剣”幻影剣”はその数を増やし、計四本の幻影剣がバージルの周囲に配備される。

『——アハッ』

スランの喜悦満面の声が漏れるのと同時に、弾丸のように幻影剣が射出される。

風を斬り裂き迫る剣を、スランはほんの僅かに身を捻って交わす。しかし、致命的な隙でもあった。

大勢を崩したスランに、空間をも斬り裂く一撃が迫る。

その斬撃は、彼女の四肢の一つを斬り飛ばす筈だった。

「——グッ!？」

苦悶と共に、バージルの腹部から紅いしぶきが噴き出す。

(傷が……!)

全力の一撃は、バージルの腹部に走る深い裂傷を開かせた。

『あら、だらしないのね』

動き鈍った剣をかい潜り、常人には見切れぬ速度でスランの鉤爪がバージルの胸を引き裂く。

受けた傷と腹部の傷は深く、バージルは思わず膝を折った。身体に熱した鉄杭を突っ込まれたような痛みと、ダンテとの死闘で失われた体力が彼の体を重くする。

『いいことを思いついたわ』

うずくまるバージルの側に舞い降りたスランの手が、彼の頬に寄せられる。

『あなたに”プレゼント”をあげる。“烙印”のほうがいいでしょうけど、きつと気に入ってくれると思うわ』

言うや否や、翼手が動き、バージルの体を鉤爪が挟り始める。胸、腹、背中、腕、足に無数の傷が刻まれ、血が舞う。

そして、最後の仕上げとばかりに、鉤爪がバージルの両腕を貫い

て自由を奪った。腕を貫かれながらも、愛刀を放すことは無い。

バージルは苦痛に顔をゆがめ、スランを睨みつける。叩きつけられる殺意、憎悪を受けて、スランは嬉嬉とした笑みを浮かべた。

『フフッ。いいわア、あなた。あなたの憎悪も、苦痛も、私には心地のよい調べ。もっと聞かせてちょうだい』

抱き寄せるように、彼女はバージルを包み込む。ぐったりとした体は彼女のなすがままになり、その命の火も消えるかと思われた。

だが、一つの変化が、それを覆す。

バージルの体を囲むように、無数の鈍く光る魔法陣が出現する。それに呼応するように天から蒼き雷が彼の体に落ちた。

膨大な魔力の奔流がスランを弾き、バージルの拘束を解いた。その力は彼の体へと吸い込まれるようにして収まる。

『退け』

『ッ！？』

スランの耳に、殺気が込められた声が届く。

翼手を広げ、瞬時にバージルから飛び退く彼女の元に、研ぎすました白刃の閃きが襲う。

空を切り裂く斬撃は、床の人面にほんの僅かな赤い液体をこぼさせた。

血の滴りはスランの指先から落ちていた。左手の人差し指にうっすらと血が滲む切り傷を妖艶に舐め上げながら、彼女は興奮した様子でいる。

その視線は、目の前の”蒼い悪魔”へと向けられていた。

父親である悪魔“スパイダ”から受け継いだ、体に宿る悪魔の血を呼び起こす。

内に秘められた人外の力は、彼の体を“魔人”へと変貌させた。体に纏っていた蒼いコートは硬質化し、左腕に握られていた鞘は左腕と融合するように前腕から生えた。その鞘から抜かれた闇魔刀を納める悪魔、バージル。その顔は黒く染まり、口には鋭い犬歯が並んでいる。頭部には兜のように角が覆っていた。

『“やっぱり”……思った通りね』

変化はそれだけに止まらなかった。

スランが楽しげに呟くさきで、バージルの体を覆っていた傷が癒え始める。

細胞と細胞が互いに結びつき、抉られた肉を修復する。瞬く間に、バージルの体からは跡も残らずに傷が消えた。

『四肢を切り取られる方が好みだったか？』

魔人から洩れる声に殺気が込められる。身体に纏わりついていた魔力が再び形を成し始めた。

膨大な魔力により作り出された幻影剣が、彼の周囲を取り囲むように配備される。その数は先ほどの数倍。切っ先はすべてスランへと向けられていた。

『いい男ね——でも、残念』

翼手を広げ、舞台女優のように勝ち誇る。

『私の勝ち』

バージルの周囲を埋め尽くしていた幻影剣がガラスのような音をたてて碎け、空間に溶けるように消える。

原因はバージルの体に起こった変化であった。

魔人化によって癒えたはずの傷が開く。その都度修復されるが、再び傷が開くという繰り返した。

堪らず魔人化を解く。

突如として発生した傷は残り、バージルの体力を削ぎ落とした。

『どう？ 私の“プレゼント”、気に入ってくれたかしら？』

そんな彼を余所に、スランは楽しげに言葉を紡ぐ。

口を開くことさえも躊躇うほどに疲弊したバージルの顔を見て、さらに話を続ける。

『頑張ったご褒美に教えてあげる。あなたの探している魔界への道はないわ。あそこは此処とは違う世界。“神”でさえも、干渉はできない』

「なら——何故その存在を知っている……！！」

血の固まりを吐き出し、闇魔刀を杖代わりに立ち上がるバージルは詰問した。

『それは——』

彼女が口拓く寸前、両者の間に黒い影が奔った。

翻る黒いマントがスランの目の前から消えた時、そこにバージルの姿はなかった。

『男と女の間に入るのは礼儀知らずではなくて、“王さま”？』

影、髑髏の騎士が遙か頭上にいた。騎馬にはバージルの羽織っていた蒼いコートが見え隠れしている。

天を仰ぐスランは、飛び立とうと翼手を広げた。

だが、それを牽制するように出現した無数の幻影剣が、スランを取り囲む。

彼女は翼手の薙ぎ払うように振り、剣はその煽りを受けて姿を保てずに空間に掻き消えた。

だが、彼女が再び二人の方に向いたとき。そこには血溜まりがあるだけであった。

『あら……つれないわねエ』

名残惜しそうに呟くスラン。

『すっごおい！！ 面白い！！ 予想外だ！！』

それを遮るように、ユービックが小さな手を叩きながら子どもの

ように騒ぎ出す。

『時の接合点では予測できぬことがおこる。ごくごく微少ではあるが……』

『すべてを見越すことなんて不可能よ。私たちもまた、神そのものではないのだから……それとも、これも定められた運命の一つ……』
ボイドに問いかけるようにスランが語る。本人は縫い合わされた
瞼を虚空に向けたままであった。

『どちらにしても、魚が一匹跳ねたところで、川の流れはゆらぎはしない。時はもう流れはじめてしまったわ。”5人目”の天使は誕生してしまっただから』

騎士とバージルが消えた穴をフェムトが睨む。それをよそに、スランは言葉を続けた。

『闇の時が訪れる。邪が聖を。幻想が唯物を。怨念が希望を。憎悪が愛を。死者が生者を。あらゆる闇が光を凌駕する時代。そう……日の光を月影が覆いかくすように。後に人はこの時代をこう呼ぶでしょう。”暗黒時代”と』

○○○○○○

入るときと同様に、深い闇を駆ける髑髏の馬を操る騎士。その背後には、血に濡れたバージルの姿があった。

「――何故助けた」

騎士は僅かに言葉を選ぶように話し出す。

『ついで――いや、“縁”、あるいは“義理”故だ』

「奴は、俺に何をした」

『“傷”だ。体ではなく、“からだ幽体”に刻まれた傷。奴は高位の存在。肉体のみならず“魂”をも傷つける。幽体の傷は肉体に干渉し、幽体の形をとろうとする。塞がった傷も、直ぐに開くだろう』

自らの傷を睨みつける。彼の傷は見る見るうちに修復され、後も残らずに消えた。だが、その身には未だに痛みが残っている。

『お前の“あの姿”は魂の形そのものだ。故に、“変われば傷ついた状態になる”。高位な存在であるならば、その傷も枷とはならぬだろうが、”人間”には致命的だ』

「俺が……人間だと――」

その一言を吐き出すと、バージルは大きな血の固まりを吐き出した。

ダンテとの激戦。そしてスランとの攻防によって彼は衰弱しきっていた。

『――今は休め。外の二人を送る“ついで”に、お前も送ろう』

髑髏から響く声を聞きながら、周囲が明るくなり始めているのをバージルは感じた。

第二話 洗礼（後書き）

どうも幻痛です。

第2話目にして二回ほど書き直すという難産。

今回、やや特殊な単語が出ていますが、細かい説明は後々にしよう
と思っています。

原作を読んでも不明瞭なところが多いので、独自設定になるかも知
れませんが。

原作が原作なので、作者の些細な勘違いが致命的になりかねません。
なので、感想だけでなく、鋭い突っ込みなども大歓迎です。

第三話 反撃開始

”触”から数日後、日の高い青空。

降り注ぐ日差しは生い茂る木々を照らし、緑の葉から透ける明かりが柔らかな土に漏れる。

その中の一際大きな木。幹が象のように太いソレのそばにバールが佇む。

トレードマークである蒼いコートは脱ぎ、今は黒いノースリーブという出で立ちであった。

彼は巨木を見つめ、左手の閻魔刀の鞘を握りなおす。
そして右手が柄にのぼされた。

白刃が光を反射した。

腰を落とした姿勢から放たれた神速の斬撃は幹を斬り裂く。

鞘鳴りが響く中、バールが閻魔刀を納刀すると同時に、斬られているのを思い出したかのようにゆっくりと巨木が傾き始める。

大きな音をたてて倒れる幹をよそに、バールは自身の体に起こった変化を感じていた。

閻魔刀を納めた左腕から流れ出す血が落ちた木の葉の上に赤い滴を垂らす。

ただの一振り。

たったそれだけの動作で、彼の体は血塗れになっていた。スランが傷つけた肉体は治ったが、ある程度の行為によって簡単に開いてしまうのだ。

所々が裂け、皮膚の下にある筋繊維が覗く腕を一振りして流れる血を飛ばす。

木の枝にかけてあった蒼いコートを羽織る頃には腕の傷は塞がり、

木の葉を濡らす血痕だけが残った。

「すげエ剣だな」

その場を離れようと歩き出すバージルに声がかかった。

振り向いた先にいた人物は老人であった。肩まで届く白髪に同じように長く白い髭。簡素な服から覗く腕は年を感じさせぬほどに筋肉質だ。

「剣もそうだが、あんたもかなりの使い手だ」

背負っていた籠を地面に置き、手に持っていた鉈で落ちていた枯れ木の枝を落としながら老人は続けた。

「剣も本望だろうよ。そんだけ見事に使いこなされるってのはな」
枝を落として棒状になった木と落とした枝を籠に入れ、また新たな枯れ木を同じように処理する。

「しかし、あいつらと一緒にここに来たときには立つこともままならなかった癖して、数刻で剣を振るなんてのは相当なもんだな」

「何か用でもあるのか」

「いや。俺は薪を拾いに来ただけだ。そこにあんたがいるとは思もしなかったがな」

飄々とした物言いでバージルの鋭い視線を交わす男、ゴドーは手を休めずに作業を続ける。見る見るうちに籠には薪が貯まっていく。
「だが、娘が心配するといかん。一度、山小屋に戻っては来れんな？」

「必要ない」

にべもなく、ゴドーに背を向けて去ろうとするバージル。

その彼の目前、包帯に全身を包まれた男。ガッツが走り去っていた。靴も履かずに裸足のまま、鬼気迫る表情で走り去っていった。
「なんだ。あいつもスツカリ元気じゃねえか」

「……」

森の奥深くへと進むガッツをみてゴドーは呟き、バージルはそれを見つめるだけだった。

不意に、バージルが森の暗がりに視線を向けた。

その先には闇に紛れるように白い髑髏が木々合間をすり抜けるように馬を走らせていた。

「どうした？」

ゴドーの問いに答えず、バージルは歩きだした。

ガッツの後を追う髑髏に続くように。

「……全く、どういつもこいつも自分勝手な奴らだな」

薪で一杯になった籠を担ぎ、一人愚痴を言いながらゴドーはその場を後にした。

○○○○○○

ガッツが目覚めたのは薄暗い洞窟の中であつた。

流れる小さな滝がたてる音が洞窟内に響きわたっている。壁の穴から漏れる日差しが暗い洞窟を照らしていた。

視界の隅にみえる削り出された階段をコツコツと音を立てて降りてくる人影が見えた。

「誰だ……」

包帯などが乗った盆を持つ人影、ガッツの背丈の半分もないそれはガッツの声に反応して声を上げた。

「ガッツ、気がついたの！？」

駆け出す影。だがガッツに到達することはなく、湿った岩盤に足を滑らせて盆にのった包帯をぶちまけながらひっくり返った。

「びよえええ！ いだいよウ！！」

「エリカ……？」

盛大に泣きわめく少女。ガッツはその少女のことを知っていた。

「だめだよエリカちゃん。そんなにあわてちゃ滑るんだから」

「リッケルト……？ どうして……？」

そう言いながら階段を下ってくる影がまた一つ。その影はガッツ

の声に反応して表情を変えた。

「ガ……ガッツ……！」

リッケルトはエリカのそばをすり抜けてガッツの元へと駆け寄った。

「気がついたんだね!!」

「あ、ずっーい。エリカが先イ」

ケロリとしたエリカが便乗するように参加する。大した痛みではなかったようだ。

「も……もうだめかと思ってた……四日もピクリとも動かなかったから……」

「ここどこだ……なんでお前達と一緒に……？」

「ここわたしん家の裏山だよ。んとねー、とーちゃんの”コードー” っの」

「鉱洞ね」

エリカの言葉を補足するリッケルト。

「もーびっくりしたんだよ! このリッケルトがいきなり家にきてケガしている人がいるって……来てみたら、それがガッツでエ……」

「”リッケルト”。こっちだってびっくりだよ。まさかガッツの知り合いの家だったとはさ」

「変な騎士にね……オレたちここへ連れてこられたんだよ」

「騎士……？」

ぼんやりとした表情でガッツは呟くように言った。

「不思議なことばかりでオレ、何が何だかさッパリだよ。ねえ、あの竜巻の中でいったい何があったの? グリフィスの救出は……このケガは? 他の……他のみんなはどうなったの……？」

「……ほかの——」

呆けたように呟く。目覚めたばかり鈍い頭が急に覚醒し、思わずガッツは跳ね起きた。

「わッ」

「……………!!」

不意の行動に驚くエリカ。ガッツ自身、起きた衝撃で体中に痛みが走り、歯を食いしばった。

「いたそー」

「だ、だめだよまだ動いちゃ……!」

押さえようと手を伸ばすリッケルトであったが、不意にガッツに胸ぐらを捕まれた。

「キャスカは……キャスカは……どこだ!？」

「……キャ、キャスカは………」

「どこだ!？」

「キャスカおねえちゃんならあそこだよ。ほら」

焦ったように詰問するガッツにエリカが答えを出した。ガッツが視線を移す。彼女が指さす先で、キャスカが小さな滝のように流れ出す水を服を着たまま浴びていた。

「……キャス……」

「あ、あの……」

痛む体を引きずるようにベッドから抜け出す。その彼を止めようとしたリッケルトは言葉を掛けかねていた。

” どう説明すればいいか ” 分からなかったのだ。

「キャスカ……」

最愛の名を呼び、また一步近づく。キャスカはガッツに気づいたのか、振り向いて彼を見た。

だが、それだけだった。

彼女はガッツを見て、自分を抱きしめるように身を縮ませた。

「キャス……」

彼女の奇妙な行動を不審に思ったが、ガッツはさらに歩みを進めて彼女の肩に手をかけた。

「ヤアアッ!!」

「キャスカ……?」

肩に手をふれた瞬間。キャスカは子供のような悲鳴を上げて身をそらした。彼女は震えていた。

「な、何のマネだよ……もういい、もう終わったんだ。キャスカ……？」

「イヤアアア！！」

”アレ”のせいで気が張りつめていたのだろうと安易に考え、ガッツは彼女の手を残った右手で取った。しかし、更なる悲鳴を上げるだけで一向に落ち着く様子がなかった。

「わからないんだ。ガッツだって……わからないだよ」

リッケルトが目を伏せながら言った。とても見ていられないとでもいうような表情であった。

「……冗談やめろよ。こんな時に……キャス——」

「……！！」

彼の言葉を否定するようにガッツはキャスカの手をさらに強く握った。

彼女は悲鳴を上げることとはしなかった。ガッツの手に噛みついたからだ。

子供のように。涙を蓄えて。

思わず手を離す。自由になった途端、キャスカはガッツの元から離れてエリカの元へと走った。

そして彼女の小さな体にすがりつき、荒い息を吐きながらガッツを見る。その瞳はとも仲間を見るようなものではなかった。

「おーよちよち。おっかないお兄ちゃんですねェ。ガッツだめだよオ。キャスカお姉ちゃんいじめちゃあ」

あやすようにキャスカを撫でるエリカ。呆然とした表情で佇むガッツに恐る恐るとリッケルトが声をかけた。

「二日前に目が覚めてからずっとこうなんだ。体の傷は大丈夫なんだけど……わからないんだ！ 覚えてないんだ、ガッツのこともオレのことも……心を許すのはエリカちゃんだけで……」

彼の言葉に、ガッツはすぐに反応できなかった。理解したくなかった。

「キャス……」

否定するようにキャスカに再び手を伸ばす。だが、彼女は小動物のように疎みあがってエリカを握る手に力を込めただけだった。

「んぎゅ」

そのおかげでエリカは肺に残った空気を吐き出した。

「……」

ガッツは何も出来なかった。手を伸ばすことも、声を掛けることも。

その足はキャスカたちのそばをすり抜けて外へと続く石階段へと進んでいた。

「ガッツどこ行く気なの！？ そんな体で……」

思わず声を張り上げるリッケルト。だが、わずかに振り向いたガッツの包帯の下から流れる血の涙をみてハッとした表情になった。

「ガッツ！！ だ、だめだよ！ 今無茶したら、命にかかわるよ！

！ それに……外には絶対出ちゃいけないって……”あの人”が……」

制止の声も届かず、ガッツは薄暗い鉱洞から出ていった。

ガッツが走るのをやめたのはあたりがスツカリと暗くなってからであった。

ひたすらに走ってたどり着いたその場所は草原であった。一面に草が生い茂り、足で踏んだ先から森のにおいがした。

空に浮かんでいた太陽は姿を隠し、入れ替わるように月が薄い明かりをガッツに注いでいた。

しかし、流れる雲が月を遮り、辺りはより一層夜の闇を深くした。やがて、空を覆っていた雲から滴が落ちてきた。それは徐々に数を増やし、草原とガッツに降り注いだ。

仰向けに寝転がったガッツは頬に当たる雨粒を感じながら、目覚める前の出来事を思い返していた。

異形に貪り食われた仲間たち。生き残ったキャスカでさえ”変わってしまった”。そして、フェムトとして変わってしまったグリフィス。

雨音が響く中で、ガッツは声を聞いた。雨音のそれとは違う忍び笑いのような声。

「グッ!？」

首筋に痛みを感じた彼は上体を起こして反射的に手をかけた。

ヌルリとした感触はあの惨劇で出来た烙印から流れ出していた。

(……何だ?)

ザワザワと草と雨がぶつかる音に紛れて近寄ってくる存在に目を凝らす。

やがて、声が聞こえた。

『目だ…』

『腕…』

『オレのだ…』

『肝…』

『オレの…』

『脳みそ…』

草の合間の暗がりから覗く一対の目。それが草原を見渡す限り一面に存在していた。

(……また、あの悪夢の続きか!?)

『心するがよい』

背後からかけられた声に振り返る。そこには三度目の再会となる髑髏の騎士がいた。

『これがこれからの”お前の世界”。現世と幽界の境界。”狭間の世界”だ』

髑髏の馬具を纏った馬に跨る騎士はそう言った。

(こいつはあの時の……)

暗がりに潜んでいた”何か”が音を立てて這いよるようにガッツに殺到した。

『これを使え』

髑髏の騎士が自身の剣を抜き、ガッツへと投げた。

「ち……」

反射的に剣の柄を握って受け取った彼はおもわず声を上げた。

騎士の両刃の剣は盾のソレと同様にバラがイメージされているのか柄には茨のように棘が生えており、それは持ち手部分も同様であった。

おかげでガッツの手の平は血だらけになった

だが剣に悪態をつく暇もなく、忍び寄った”何か”が彼の前で跳ね上がった。

それは人間に上半身のような異質なものだ。呻きのような声を上げて手を伸ばしてくるそれに、ガッツは悲鳴を上げ剣を振った。
(何だ……この水を切る様な手応えは!?)

斬り裂いたソレは笑いながら消え去った。肉を斬るのは違う妙な感触をガッツの手に残して。

『これはこの地をさまよう死霊どもだ。死してなお生命に執着する亡者達……お前の熱き血肉を欲して群れ集まってきた。“生け贄の烙印”。それが闇の者どもを引き寄せた』

ガッツに首筋、血を流す烙印を見据えて騎士が言った。死霊はガッツには襲いかかるが、騎士は襲わずに遠巻きにしているだけであった。

『血……』

『命……』

『オレに命を……』

呻き求める死霊はガッツに殺到した。

上段から振り下ろし、そのまま刃を返して切り上げる。病み上がりである彼はソレを何とかしのいでいた。

だが、烙印が更なる痛みを発したため、思わず動きが止まった。

それを逃さずに足下から忍び寄っていた死霊が彼の足にすがりつく。

『入れてくれ……』

『オレ達を……』

『この体の中に……』

『入れて……』

動きが止まったガッツの元に死霊が群をなして取り付く。死霊はガッツと重なるようにして彼の”体”にとけ込んでいった。

体中の筋が不自然に痙攣して痛みを発した。

「ガッ、がああ!!」

悲鳴に近い雄叫びを上げ、渾身の気合いを入れる。それに反応して群がっていた死霊が思わずガッツから跳び退いた。

『気を強く持て。さもなくば取り殺されるぞ』

胃液を吐き出して体を支配していた感覚をぬぐい去ろうとするガッツに向かって騎士が述べる。

『こやつらにしてみれば、さしずめお前は暗闇に投げ込まれた松明。さぞやいとおしく眩しげに映るだろう。これがこれからお前が歩まねばならぬ現実だ。肉の体では目にする事のかなわぬ境界。互いに重なりながら触れあうことのない二つの世界の狭間にお前は立たねばならぬ』

『どうして……!?!?』

『それが生け贄の烙印を受けた者の運命。^{さだめ}お前の肉体もその血の一滴までもすべて闇の者どもにささげられた供物なのだ』

怯えていたのか遠巻きにしていた死霊が楽しそうに踊り、ガッツへと襲いかかる機会を待っていた、

「運命……」

呆然と立ち尽くす彼をみて好機と思ったか、再び無数の死霊が彼に襲いかかる。

「運命! 運命!! 運命!!! うるせえってんだよオオ!!!」

棘の生えた柄をさらに強く握りしめ、ガッツは死霊に剣を振るつた。

気合いと共に切り捨てられた死霊は消え失せ、後続にいたほかの死霊はたまらず空をさまよった。

ガッツは振り返り、切っ先を髑髏の騎士に向ける。

「そのしたり顔で御託を並べるのは、オレが取り殺されてからにしてみらおうかドクロのおっさんよ!!」

ガッツの言葉を騎士は静かに聞いた。

「生け贄だ!?! 供物だ!?! 運命だ!?! 小難しい理屈並べてんじゃねえぞ!!」

不敵な笑みを浮かべ、ガッツは一つの結論に至った。

「要するにこれは戦だ!! いつもと何も変わっちゃいねえ!! 戦って最後に立ってたもん勝ちなんだよ!!」

生まれ落ちてから戦の中で育ったガッツは上段で剣を構えて吐き捨てた。

「いいか!! てめえら今、地獄にたたき返してやるから、あの”顔色の悪い連中”に言っとけ!!」

鬼気迫る表情で、彼は死霊どもを睨みつけた。

「オレは殴られたら必ず殴り返す!! オレを”喰い残した”のが貴様らの”運のつき”だってな!!!!」

周囲を浮遊する死霊に自ら斬りかかった。

「貴様らも!」
「続けて二匹。」

「あの腐れ化け物どもも!」

背後から迫る数匹を薙ぎ払う。

「一匹残らず!」

二体の死霊の口を吹き飛ばす。

「オレが狩り殺す!」

足下から忍び寄る死霊に上段から剣を降りおろして頭を割り、吼えた。

「これが、開戦の”のろし”だ!!!」

第三話 反撃開始（後書き）

どうも幻痛です。

ずっとガッツのターンでお送りしました。

タイトルで「青い悪魔と狂戦士」と言っており、重要なシーンでもあるということもありますが、今書いておかないと後々説明が面倒になりますのでガッツの話も書く必要がありました。

おかげでバージルの登場シーンが冒頭のみという……

第四話 人と魔の子

(フ……まさにものがく者よ。あの蝕を生き延びたるはまぎれもなくこの力ゆえ)

無数に襲い掛かる死霊どもを切り捨てるガッツを見て騎士はそう評価した。

変化が起こる。

周囲を浮遊していた突然死霊が消え去ったのだ。

「……何だ。もう終わりかよ？」

『違う。見つけたのだ。もう一つの松明を』

「松明……？」

また小難しいことを……とガッツが愚痴る。

だが、もう一つの松明という言葉を反芻するうちに、一つの考えに至った。

もう一つ、烙印が刻まれたものは近くには一人しか居ない。

彼は直ぐに行動に移した。茨の剣の持ち主である髑髏の騎士に向かって剣を突きつけたのだ。

「おっさん。その馬ちよっくら貸してもらうぜ」

ガッツは騎士の跨る馬に目をつけた。どれ程の距離を走ってきたのかはわからないが、徒歩よりは圧倒的に速くキャスカの元にたどり着けるだろう。

「早くしねえか!!」

剣先を突きつけられているというのに一切反応が無い騎士に業を煮やしたガッツは思わず声を荒げた。

『フ……』

「うお……お!？」

騎士は髑髏の兜の奥で軽く笑うと、剣を持つガッツの手首を掴んで引き上げた。

大柄のガッツがいともたやすく宙を舞い、馬上の騎士の背後に落ちた。衝撃で彼の手から離れた茨の剣を騎士が受け止める。

『お前を乗せるのはこれで二度目だ。振り落とされるなよ』

騎士は馬を操り駆け出した。ガッツの来た道に戻るように。

雲で隠れた月のぼんやりとした明かりを一切の躊躇いもなく進む髑髏の馬。それはまるで風のようなであった。

「あんた、オレを乗せるのはこれで二度目だと言ってたよな！どいうことだ！！」

『……あの異界の地よりお前達を運び出したのはこの私だ』

「何……！？」

『礼には及ばぬ。ついでのことだ。これも、何かの縁だ』

「……あんた、一体何者なんだ？」

『やつら人外の者どもに仇なす者。そうとだけ言っておこう』

「——どうしてオレ達をあの裏山に？ あの場合のことは誰にも話したことねえぞ、オレは」

『さてな……私はただあの異界の門より最も近い安全な地にお前達を運んだだけだ。あの山はかつて妖精どもの住みし地。妖精が去った後も大地の気が強く、闇の者どもから身を隠すにはうってつけの場所だった』

数年前、山籠りの折りにゴドーとした会話を思い出してガッツは髑髏の言葉を反芻した。

『それがお前のゆかりの地だとは知らなかった。』偶然だ。お前が命を取り留めたのも同じく、お前の友が”偶然”持ち合わせた“妖精の鱗粉”によるものだ』

「妖精の……鱗粉？」

体を眺め、傷がふさがっているのに今更ながらに気づく。

『極上の良薬だ。たやすく手に入るものではない。妖精は滅多なこ

とでは人前に姿を見せぬからな』

そういつて騎士は少しだけガッツに顔を向け、

『縁があるのかもしれない。妖精と』

「……」

『フ…それでもやはり運命とやらを信じる気にはなれぬか』

「……ああ——しかし、身を隠すのにうってつけてんなら、どうしてキヤスカが…?」

『おそらく鉱洞の外に出たのだろう。悪霊どもを近づけたくなくばあの場所を離れてはならぬ。日の光が差し込む場所ならばまだいい。日没以降、あるいは暗き森などに足を踏み入れたならば、たちどころに亡者どもが群れ集まってくる。先ほどのお前の様にな』

「おい、ちょっと待てよ! ……ってことはこの先ずっと、あの穴ぐらの中にいろってことか……? キヤスカは……」

『あれだ!!』

ガッツの問いを遮るように髑髏の騎士が声を上げる。視線の先、切り立った崖の先に佇むキヤスカがいた。身に着けた貫頭衣を雨で濡らし、その周囲には死霊が漂っている。

「キヤス……!!」

『待て!!』

騎士の制止の声が届く。

「何だ!？」

『様子がおかしい。悪霊どもが彼女に危害を加えていない。あれだけ集まりながら……なぜだ?』

騎士の言う通り。キヤスカを狙う死霊どもは彼女に群がっているが、身体に触れるようなことはせずに一定の距離を保っている。

「ちッ! 危害があつてからじゃ遅えんだよ!!」

馬から飛び降りてガッツはキヤスカの元へと駆け寄った。

「キヤスカ!! おい! 無事か、ケガねえか!？」

「……あ、ああ」

手をかけたガッツはキヤスカの異常に気付いた。あれほど彼に怯

えていたのが嘘のように大人しい。

「キャスカ……どうしたってんだよ!？」

「……う」

彼女はガッツに向き合うと彼の腕を強く掴んだ。爪を突き立て、皮膚がむけて血が出るほど強く。

「キャス……!？」

「あ……!! ああ……! あ……ん——」

苦痛の声を上げると同時に、さらに彼女の手に入力が入る。

「ひぎ……」

一際大きな声が彼女の口から漏れる。

同時に、彼女の股座から血に濡れた“何か”が落ちた。

キャスカの股ぐらから落ちた肉の塊。

その塊には小さな四肢と肉に埋もれた瞳があった。そしてその瞳はガッツを見つめている。

(魔物……!?)

反射的に踏みつけようと足をあげる。しかし、肉塊に覆いかぶさるようにキャスカが間に入ったために出来なかった。

「あああッ!!」

「キャスカどけ! 何のまねだ!!」

「あーッ、あー!!」

『その娘の子だ』

肉塊をかばうキャスカをどけようと声を荒げるガッツに髑髏の騎士の声が響いた。

『その娘、子を宿していたのだ。その宿したばかりの形にもならぬ胎児に、魔が取り付いた。おそらく、あの新しきゴッド・ハンドとのまぐわいによって……それは、生まれながらに魔の性を受けた。呪われし子だ』

「……それじゃ、こいつは……」

ガッツが魔物を見据える。手のひらほどの大きさであった魔物がムクムクとその体を肥大させ、やがて人間の赤ん坊と同じくらいの

大きさにまでなった。

「……待てよ」

『殺しておいた方がいい。それは人の子にあらず。いずれはお前達に災いをもたらすぞ』

「うるせえ!! ちよつと待てよ!!」

キヤスカは肉塊、子を抱きかかえた。子はキヤスカの胸に刻まれた烙印から流れ出す血を舐めた。乳を求める乳児の様に。

「……!!」

見ていられず、ガッツは魔物を取り上げた。キヤスカはそれにすがりつくように手を伸ばして唸る。

「あ……ああッ!!」

(違う……!!)

魔が取り付いた胎児には心当たりがあった。いや、それ以外に考えられなかった。

ガッツは手の中で蠢く魔物を見て目を背けたくなった。

「あうッ!!」

我が子を取り返さんとキヤスカがガッツの手に噛み付く。

(こいつは魔物だ。仲間を喰い殺し、お前をこんなにしちまった魔物の一匹……違う……)

日が昇る。悪霊は光に照らされて消え失せる。

「あが……」

ガッツの手に収まっていた魔物の姿も、空間に溶け入るように消えた。

「はあ……あああ!!」

虚空に手をのばすキヤスカ。その手は何も掴むことがなく、ただ空を切るだけであった。

「あう……うー!!」

「……!!」

ガッツはただ、キヤスカを抱きしめることしか出来なかった。

『———そうか。お前の子か……』

全てを悟ったかのように、髑髏の騎士が語りだす。

『塵になったわけではない。他の悪霊とも同じ、光に追われ、より幽界に近き場に”ずれた”のだ。いずれまたお前たちの前に姿を現す。子は親を慕うものだ。……魔は、魔なりのやり方だな』

「ガッツー!!」

草原の先、ゴドーの工房の方角からリッケルトとエリカが駆け寄ってくる。いつまでも帰ってこないガッツを心配して来たのだろう。

『さらばだ』

ガッツに声をかけた髑髏の騎士は、いつの間に彼のそばを離れ、日の射し込まない林の影にいた。

『我らもまた相見えることもあるだろう。縁があらば……人外どもを追うならばその烙印の導きに従うことだ。それは強き魔に感応する。だが心するがいい。お前の行く道は夜の道。闇に潜む物どもと対峙するとき、お前自身もまた闇に身を沈めていることを』

騎士がそう言うのと、リッケルトたちがガッツたちの元へたどり着くのはほとんど同時であった。

『良き旅を。もがく者よ』

跨る馬を操り、騎士は闇の中へと消えていった。得体の知れない奴だとガッツは思ったが、今はともかくキャスカをつれて戻ることが先決だとリッケルトたちの方へと歩みだした。

しかし、背筋が凍るような殺気が彼の歩みを止める。

同時に、首筋に刻まれた烙印が死霊のソレとは比べ物にならないほどの痛みを発した。激痛の余りにたまらず膝を着く。

「大丈夫!？」

彼が急にしゃがみ込んだのを見ていたリッケルトが心配して駆け寄る。

今のは——？

首筋から流れる血を拭い、ガッツは烙印が反応した方角、騎士の去った森を見た。

だが、そこには風に揺れる木々が存在するだけで、彼に悪意を持

つ存在の姿は見えなかった。

「ああ、大丈夫だ。少し無茶がすぎただけだ」

心配そうに彼を見るリッケルトに、ガッツは何事もなかったかのように語りかけ、立ち上がる。彼の残った左目に、朝日がまぶしく輝くのが見えた。

朝霧の中を進む騎士。

やがてその馬は森へと差し掛かろうとしていた。朝日が昇ろうとしているが、木々に遮られてその中心部は未だに闇で覆われてる。

「魔の子は災いをもたらすか」

森に足を踏み入れた騎士に声が掛けられる。

まるで直ぐ側から、耳元で囁かれるように静かで、ハッキリとしたものだった。

『子は親を慕うものだとも言った』

髑髏の騎士は馬を操り、振り返る。

視線の先、森の暗がりからあらわれたのは蒼いコートを纏う男、バージルが佇んでいた。

『覗き見とは、些か似合わないものだ』

「答えろ」

騎士の言葉を遮るように、バージルは言葉を発した。

「貴様……スパイダを知っているのか」

『——答えなければ力尽くか』

バージルの手に提げられた閻魔刀を見て、騎士が聞き返す。彼は鞘を握りなおした。

『止めておけ。お前が私に一太刀浴びせる前に、自ら自滅するのが目に見えている』

「試してみるか？」

バージルが閻魔刀の鍔を押し上げる。鞘からのぞいた白刃は、触

れるものを切り裂かんと妖しく光を反射した。

『フ……』

髑髏の兜の奥、騎士がくぐもった笑い声を出した。そしてバージルに、

『“焦り”か？ いや……力を失うことへの“恐れ”か……』

「恐れなど……！」

『痛みで立つこともままならないはずだ。それほどまでに、幽体の傷は深く、重い』

怒りを滲ませたバージルを遮るように言葉を続ける騎士。それは挑発とは違い、悟らせるような声色だった。

『幽体の傷というものは深刻なもの。表層的な傷は見えずとも、その幽体は満身創痍。＜戦う行為＞そのものが、お前の寿命を縮めかねない』

私と死合うこと事態が無理だと、騎士はさらに言葉を続ける。

『私にはやるべきことがある。＜盟友との契り＞とは言え、それを疎かには出来ない』

馬は騎士の意を読み、再び森の奥へと歩みを進める。バージルがそれをさせまいとするが、

『その傷を治したくば、魔女を捜せ』

騎士の言葉に、思わず聞き返した。

「魔女？」

『その者達であれば、幽体の傷を治す術を知っているだろう』

馬は足を止めずに徐々にその姿を闇へと同化させていく。

『剣を振るのは怒りだけいい。だが、それだけでは先は無い。次に見える（まみえる）時には、約束を果たせる様になっていることを期待しよう。さらばだ』

その言葉を最後に、騎士と馬は姿を消した。彼の耳には馬の蹄鉄の音も、騎士の鎧の音も聞こえなくなり、ただ木々の葉が擦れる音だけが届いた。

残されたバージルは先ほどの言葉を反芻する。

『魔女』。

元の世界へと戻る術もなく、手がかりもない暗中模索の中に見つけたキーワード。

その言葉を鵜呑みにすることも出来ないが、他に頼りもない。

少なくとも、この体を元に戻す手段となると聞かされて、『何もしない』という選択肢は存在しなかった。

バージルは歩き始めた。力を取り戻すために。失わないために。

○○○○○○

ゴトーの工房に戻った一行は雨に濡れた服と包帯を交換し、火を焚いて暖を取っていた。

「結局、戻ってこなかったな」

「何のことだ？」

リッケルトの突然の呟きに、思わず聞き返すガッツ。彼は思い出したかのように、

「ずっと寝込んでたガッツは知らないよね。実はもう一人、ここに居たんだよ。上質な蒼い外套を着た貴族みたいな人が」

とガッツに告げた。

「蒼い……外套？」

「すつつつごいッ、カッコイイんだよ！ もうね、なんていうかね……」

エリカが興奮したように話す。興奮しすぎて何を言っているのかが分からなかったが、聞くところによると、どうやら『あの場』にいた男のようだ。

「そういえば名前を聞いてなかったね」

「……」

奴は何者なのだろうか。

ガッツは自問した。気を失ってしまった後のことは分からないが、『蒼い男』は化け物をいとも簡単に屠っていた。髑髏の騎士のように、人外に関わりのある存在なのだろうか。

「わからねエ事ばかりだ……」

目覚めてから目まぐるしく自分の常識が覆されていく。化け物の群れ。生贄となった鷹の団。化け物になったグリフィス。そしてなによりも。

「あー、うー」

「駄目だよお姉ちゃん！ 着替えないと風邪引くよ」

着替えを持ってキャスカを着替えさせようとするエリカ。それを濡れたままの格好でキャスカは抵抗を続けていた。

とは言え、出産直後ということもあってか始めよりも元気が無い。どんな形であろうと、『子』を失ったのだ。壊れてしまった精神でも感じることはあるのだろう。

彼女の胸元に刻まれた烙印は魔を呼び寄せる。日の当たるうちは外に居られるだろうが、闇が訪れれば洞窟へと戻らなければならぬ。一生だ。

子どもがダダをこねるように抵抗するキャスカは、ガッツの知る彼女とは違っていた。いや、＜変えられてしまった＞のだ。

ガッツは思わず隻腕の拳を握り締める。心の中、何かドス黒い凶暴なものが彼を急き立てていた。

戦は、まだ終わっていない。

第五話 足掻く者達

ミッドランド国境地帯。

空に浮かぶ太陽は、三分の二ほど本来の大きさを取り戻していた頃、高原にある馬車が移動を繰り返して出来た道を塞ぐように、並び駆ける馬に乗った集団が居た。

集団は全員が同じようなつくりの白い鎧を見に纏っており、その先陣を切る者が持つ旗には×の字になるように繋げられた鎖が描かれていた。

「あれは、聖鉄鎖騎士団――！」

集団が道いっぱいに広がっていたために、脇にそれていた子連れの母親が驚いたような声を上げた。

過ぎ去っていく騎士団を見送りながら呟くように、

「法王庁の軍隊がどうしてここに……」

母親の声は行軍の地響きに掻き消されていった。

「ねーねー、見ましたアザン副長。今の巡礼の親子、母親の方けっこう美人でしたよ。副長の好みじゃないですか。きっと戦災未亡人ですよ。」

行軍する騎士団。その中の一人、狐を模した兜を被った男が軽薄そうな声を上げる。

「くオラセルピコ――！ 貴様、黙示録探索の任を何と心得る！？ 厳粛かつ恐るべき神の奇跡を目の当たりにしながら、こともあろうに婦女子ごときに目を奪われるとは……このバチ当たりめが――！」

傍にいたアザンが大柄の体を揺らして兜の面を上げ、髭を蓄えた顔を晒しながら叱りつけた。

「もー、お堅いんだからア。照れるオヤジはみつともないですよー。そんなんだから、その歳になっても独り身なんですよオ」

セルピコも兜の面を上げ、開いているのか分からない狐のような細目を歪めている。口には笑みが浮かんでいた。

「余計なお世話じゃい！ これでも聖職者のはしくれ、嫁などもう気は金輪際無いわ！」

「今時、はやりませんよ、そんなの」

「その二人！ いい加減にしないか、任務中である」

騒ぎ始めた二人に咎めるような声がかかる。声は二人より前方の騎馬から聞こえた。それ女性のもので、声の主は天使の羽を模した兜を身につけていた。

「怒られちゃいましたね？」

「貴様のせいだろ……」

狐顔の男が悪びれる風もなく髭面の男に小声で話しかける。髭面の男は腹立ち紛れに唸った。

「伝令ー！」

列の先頭から女性の下へ走りよってくる騎馬がいる。それを見た女性は手を上げることで行軍を停止させた。

「何事だ？」

「み、見分かりました!!」

「見つかった……!？」

「ほんとに!？」

「……ついに」

伝令の知らせに周囲に動揺が走る。

「確かか？」

「はっ！ 間違いなく予言どおり、“赤き湖”が出現しました」

伝令の先導によりたどり着いた高原にある湖は、鎧を纏った死体

の肉片が浮かび、その澄んでいた水を赤く染め上げていた。

騎士団はその『赤き湖』のほとりに並び、信じられないものを見るような目をしている。

「こ、これは……！」

「間違いない、まさに“赤き湖”預言書の通りだ……！」

「おお、神よ……！」

騎士たちは口々に驚きの声をあげる。

「黙示録にいわく、五度太陽が死せるとき、新しき旧き名の都の西に赤き湖が現れる」

アザンが口を開き、続きを引き継ぐように団長、ファルネーゼが言葉を紡いだ。

「それはすなわち、五番目の御使いが舞い降りし証し……御使いは闇の鷹なり。罪深き黒き羊達の主にして、盲目の白き羊達の王。世界に、暗黒の時代を呼ぶ者なり」

『蝕』と共に出現した黒き太陽。その出現を期に、世界は変質を始めていた。

○○○○○○

草原に一筋線を入れたような道を一台の馬車が進んでいる。馬車に繋がれた馬は例外なく痩せこけ、よたよたと覚束ない足取りで車を引っ張っていた。

幌がついた馬車を操るのは夫婦。馬車には数人の子どもが乗っていた。全員が馬と同様に痩せこけている。夫婦の瞳には疲れが見えているが、子どもたちは顔を外に出して景色を楽しんでいた。

「お父さん。どうして街を出るの？」

子どもたちの一人、一番年上の長女が夫婦の間に身体を差し込むようにして父親に問いかける。

「あそこは……もう終わりだよ」

「終わりって？」

「『魔女』だよ。領主様が魔女を囲っていたんだ」

「魔女って、御伽話の？」

「そう。時機に魔女狩りに軍が派遣されるだろう。そうなったら……」

娘たちを見て、父親は悲しげな目をした。彼は旅人から『魔女狩り』が行われた町では、無実の者でさえも魔女にさせられると言う噂を聞いていたのだ。娘を持つ父親として、家族をそんな危険な目に会わせたくなかったのだろう。

「でも……どうして領主様がそんなことするの？　もしかして私たちのせいなの？　領主様のおかげで、私たちは貧しくも無いし、税金だってちゃんと払えたから？」

「——これは噂だが……領主様は『魔術』に興味があったらしい。それも、領主様の妻と子どもが亡くなってからだ。皆、噂していたよ。領主様は気が触れたんだと……以来、領主様は姿を見せない。城からは使いの者が出てくるだけだ」

「魔術……それって<イケナイ>ことなの？」

「当たり前だろ！？」

「でも、それで大事な人が生き返るんだったら、私なら魔術使いたい。お父さんやお母さんが死んだら……悲しいもの」

「ああ、お前は優しい子だな」

父親は長女を抱きしめる。母親も、それを微笑ましげに見ていた。ひとしきり抱きしめると、父親は娘を放して妻から手綱を受け取る。「盗賊が出るって噂もある。いつでも逃げ出せるようにしないとな」「ええ、気をつけましよう」

夫婦は子供たちに聞こえないように静かに頷き合った。

「お姉ちゃんばかり褒めてもらってずるい！」

「そうだそうだ！」

「そんなこと言わないの。あなたたちだって優しい子なんせしよう」

長女は再び幌の中に入ると妹たちを褒めて機嫌を取る。慣れたものであった。

「お姉ちゃん！」

突然、馬車の後部から外と見ていた四女からお呼びがかかる。長女は不思議そうにしながら、

「どうしたの？ 何か面白いものでも見えたのかしら」

「ほら、アレッ！ 本が飛んでる！」

「本？」

促されるまま、四女の小さな指が指す空に視線をやる。だが、彼女にはソレらしきものが見えなかった。

「何処にも見えないわよ？」

「見えるよ、ほらッあそこ！」

半ば呆れながらも、彼女は愛する妹の妄想に付き合ってやることにした。恐らく鳥でも見つけて、夢見がちな妄想を膨らませたのだと考えながら。

晴れ渡る青空を再び眺める。今日は雲も少なく、馬車で通ってきた道の先には石壁に囲まれた町が見える。高い壁の向こう、城の一番高い塔が覗いていた。その塔と馬車の中間ほどの距離の中空、鳥のような物体が見える。

いや、違う。

羽が生えた生物が本を運んでいた。

分厚いハードカバーの本を運んでいたのは『目玉』であった。単眼に羽が生え、目から細く長い足が伸びている。それらが本を落とすまいと四本の足で抱えていたのだ。

「何……あれ」

「お城に飛んでいくよ！ 領主様のところに行くのかな？」

四女の問いに、長女は答えることが出来なかった。

『目玉』は本を抱えながら城の窓の一つに入って行く。薄暗い空間に窓から差し込む光が床の一転を照らしていた。そこには人形の”何か”が横たわり、血の池が広がっていた。

人形の棺の蓋の内側に杭が仕込まれたく鉄の処女^{アイアンメイデン}。赤い液体を満たしている大きな釜。使い込まれ、刃こぼれしてしまった刀剣類の山。

そして罪人の首を切り落とすギロチン台。

罪人を拘束する三つの穴があいた木製の枷は碎け散り、ギロチンは台から外れて壁にその肉厚な刃をめり込ませていた。

目玉は血臭の漂う空間を横切り、床に広がった赤い池に倒れている人形に近づいた。ソレが横たわる石畳には所々に傷が残っており、赤い血が流れ込んでいる。

人形の側にはフルプレート^{フルプレート}の鎧を着た兵士が四人た佇んでいる。手には剣や槍が握られ、赤い血が付着していた。騎士たちは『目玉』を見ても何の反応もせず、頭部を覆う兜からは表情を伺い知ることが出来ない。

『目玉』はく人形>の顔の側に運んできた書物を置き、投げ出された影のように黒い肌の手に留まる。

そして『目玉』は手と”同化”し始める。

まるで水面に水滴が落ちるように溶け込むそれは、やがて人型の一部となった。

ピクリと、人形の手が動く。

拍子に手が血溜まりにふれて水音を立てた。手を地面に押しつけて、人形が起きあがる。

黒い。

人形の皮膚は闇のように黒かった。体にまわりつく血が、ほんの少しだけ人型を赤く映し出す。手も、足も、指も。首も、頭もあるが、その顔には何も無かった。まるで面のようにノッペリとして

おり、光の加減で僅かに凹凸が見える程度の窪みがある。毛髪のたぐいも一切生えていない。まさに<人形^{ひとがた}>であった。

人型が起きあがると、周囲にいた騎士たちが動いた。同じタイミングで各々の武器を構え、動作を合わせて足を踏み出し、人形を突き刺した。

鮮血が宙を舞う。

槍が首と腹部を、剣が胸と背中を貫いた。人形は衝撃で体を震わせる。

だが、人型は気にした風もなくうつむいて貫かれたまま、ダランと下がっていた腕を上げて軽く振った。

それを合図に、騎士たちの武器が引き抜かれる。彼らは武器を一振りして血を払い、四方に散るようにして闇に消えた。

人型はペタリと石畳を歩み始める。そして血の円の縁におかれた本を拾い上げた。

足下に広がった血の円から踏み出した足は、血の足跡を数歩残した。人型は歩みを進めて鋼鉄の扉を開け放つ。扉は斧で切りつけられたかのような傷が幾重にもつけられていた。

扉が締まり、拷問部屋がシンと静まり返る。

そして、ウゾウゾと天井から人の頭ほどの大きさの蟲が落ちてきた。

複眼の一つ目をもち、蜘蛛のような脚を伸ばして人型が残した血に群がる。蟲は体の先、口のような器官を伸ばして血をすすった。

一匹の蟲が血を吸い始めると、天井から新たに蜘蛛の脚を持つ蟲たちがボトボトを落ちてくる。蟲達は一匹目と同じように器官を伸ばして血を啜った。

人形は木製の扉を開けて書斎へと足を踏み入れる。

書斎には天井まで本が隙間なく並べられている。部屋の中央には

重厚な作りの机とイスがあり、机上には読みかけのように開かれた本がいくつか散らばっていた。

異形は側にあった本に手を伸ばしながら、『目玉』の持ってきた書物を開く。

本を開くと同時に、面の様にノッペリとした顔に『目』が浮かび上がった。

顔のほとんどを占めるような単眼をギョロつかせ、しばらく異形はパラパラとページをめくっていく。手元の書物を開く度に別の書物に指を走らせる。その指先は鋭く尖っていた。やがて、

『魔女……此処にいるのか？』

一筋の線が目玉の下にはしり、開かれた口からは声が漏れた。鋭い牙が並ぶ口は人の頬の部分まで開き、歪んだ笑みを形どった。

○○○○○○

街道を馬車は走り続ける。

手綱を操る父親は街道の先、人が歩いてくるのを見て僅かに道を開けた。

すれ違う際にそっと顔を覗きみる。

目に飛び込んできたのは銀と蒼。銀は頭髮、蒼は一目で上質なもののだと分かる外套であった。手には黒い杖のようなものが見えたが、何かは分からなかった。

「今のは……？」

「貴族様かしら、この先には街しかないのに……」

「貴族がこんな道を歩いて行ったりするもんか。盗賊にでも馬を奪われたのかもな」

夫婦は気にもとめなかった。気にしている暇がなかったというのが正しい。

道に血と肉が積み重なっていたからだ。

「なあッ!？」

反射的に手綱を引く。馬は忠実に命令を受けてその場に停止した。僅かに馬車の重みでよろめくが肉の山に突っ込むことはなかった。

目前に迫った山からは濃厚な血の臭いが漂い、羽虫たちが湧いていた。山は人の体で構成されている。小手をつけた腕、兜をかぶった頭、切り裂かれた鎧が血にまみれて道を占領している。

そばには数匹の馬が彷徨っている。見窄らしいながらも似たような作りをしている馬鎧を見る限り、どこかの傭兵団から落ち延びた盗賊かもしれない。

まともな死体は一つも存在しなかった。すべての死体は切り刻まれ、人間の形を保ってはいなかった。

第六話 牢獄の城

「人が悪いぜゴトー」

臓物の絡みついた刀身を掲げながらガッツは口を開いた。その剣は成人男性ほどはあろうかという大きさの肉厚な両刃剣。

大きく、ぶ厚く、重く、そして大雑把すぎた。

それは正に鉄塊だった。

『ドラゴンころし』と呼ばれる鉄塊。ヒト数人分の重量の有る大剣をガッツは軽々と振るった。

「あるじゃねえか、もつとオレの戦向きのやつがよ」

ゴトーやリッケルトが見守る中、烙印の匂いを嗅ぎつけた使徒を両断したガッツは狂気に犯された笑みを浮かべた。

ガッツは“狩りのはじめの一匹”によって邪魔されていた旅支度を再開していた。ゴトーとリッケルトによって作れた漆黒の鎧、投げナイフ、連射式ボウガン、短剣、大砲が仕込まれた鉄の義手。一人で戦争を仕掛けるような武装であった。

準備が終わり、ガッツは山を下る道を歩く。キヤスカになにも言わないまま。彼女を残して。見送りに来たリッケルトはガッツの旅立ちを阻止させたかった。

「冷たい言い方だけど！　もういない人達のための復讐よりも、今はキヤスカのそばに……」

リッケルトは前を向いていた。少なくとも、なにを守るべきかは把握していた。

「終わってねえ」

「え……」

「鷹の団はまだ無くなっちゃいねえ。まだ、オレ達がいる」

ガッツはリッケルトに向き合い、自分に言い聞かせるように言葉を吐き出す。

「この戦は、まだ終わっちゃいねえ」

リッケルトの肩にガッツは手をかけた。

「キャスカを頼む。オレ達の大將だ、守ってくれよ。オレは切り込み隊長だからな。敵陣に切り込む、だろ？」

そういつて、ガッツはリッケルトに背を向けて歩き始める。同時に自問していた。リッケルトの言葉を。

復讐、戦……理由はなんでもよかったのかも知れない。ただ一つ確かなこと……今は、オレの中の何かドス黒い凶暴なもの……ただそれだけが、この両足を支えている。

不器用ながらも、ガッツは自分の道を決めた。俯いていた顔を上げる。隻眼が歩く道先を捕らえた。

前へ踏み出せと、せきたてる。

ガッツは歩きだした。

光の見えぬ深淵の道、復讐の旅へ。

○○○○○○

海を背にするように佇む城がある。

背後は切り立った崖になっているため港としては機能することがなく、王国へと続く街道からも離れているため人の出入りもほとんどないという土地だ。

城を囲うように乱立する民家の周囲には見上げるほどの高さの石壁。バージルはそれをしばらく見上げると、闇魔刀を握りなおして歩み始めた。

唯一の出入り口である門には頭の先から爪先まで覆う鎧を纏った二名の兵士がいる。バージルは悠々とその両名の間を抜けた。

兵士はただその場で直立したまま身じろぎもしなかった。バージルは兵士を訝しげに流し見るが、すぐに興味をなくしたかのように歩みを進める。門から伸びる道は緩やかな弧を描いて城の方へと伸びていた。

門の先には城下町が広がっている。立ち並ぶ民家や店にはそれなりの活気があった。

道に広げられた売場には干し肉や土のついた野菜が並んでいる。売買は硬貨で行われていたが、顔なじみの店では狩猟で得られた鳥との物々交換が行われているようだ。

「……!？」

不意に、バージルの足下がふらつく。彼は視界にはいった薄暗い路地へと入る。民家の壁に背を預け、コートの下に手を伸ばした。湿った感触が手に残る。

顔の前に運ばれた彼の手は赤く染まっていた。風に乗って運ばれるそれは馴染みのある血の香り。彼の体は癒えぬ傷によって切り刻まれていた。

髑髏の騎士が言う“幽体の傷”。それはバージルの身体を蝕み、癒えることのない傷と痛みを蓄積させていた。傷自体は直ぐに癒えた。人外の血を引くバージルには優れた再生能力が備わっている。肉体の傷はすぐさま消え去る。だが、失われた体力は戻らない。幽体の傷は彼に休息を与えることもなく、じわじわと彼を衰弱させていた。それを治す術を彼は知り得なかった。

故に「魔女」を探す必要があった。

全てを知るであろう髑髏の騎士は言った。魔女であればこの傷を癒す術を知っていると。放り出された異世界で、信じられるものは自分以外に存在しない。しかし、他に当てもなかった。

結局のところ、バージルは確かな情報一つ無く歩き続けるしかないのだ。

「そこに立たれると、日陰になって寒いんだけど」

バージルのそば、路地に差し込む日の光がバージルを照らして出来た影に収まるように寝ころんだ人物が声を発した。低い背丈に高い声。子供だ。

バージルは気配は感じていた。ただ無視していただけた。

「あんた……怪我してんのか？」

綺麗とは言い難い路地に横たわっていた人影が立ち上がり、心配げな声をかける。

バージルの胸あたりの身長しかないだろう。その小さな身体に纏う外套は薄汚れ、表の民衆とは生活環境が違うことがわかる。その視線はバージルの血塗れの手に伸びていた。

「ひどい出血だな。来な、手当するから」

纏った外套のフードを目深にかぶった子供は露出した口を動かし、バージルを誘う。

だが、バージルは従わなかった。

「あ、ちよっと！」

背後の聞こえる声を無視し、再びバージルは歩き始めた。

「どこに行くのさ！ 手当しないと死んじゃうよ！」

少年はバージルの後を付いてきた。

大きすぎる外套の裾が地面を擦りながら徐々に解れていくが、気にした風もない。バージルはただ歩く。騒がしく歩く貴族のような身なりのバージルと見窄らしい乞食のような子供は民衆のなかで目立っていた。

だが、彼らは気にも止めていなかった。

城に近づくにつれて雑な作りであった石畳が徐々に整っていく。

二人の目に鉄の城門が見えてきた。格子状になった門は下がっており、出入りができないようになっている。

門の前には町の出入り口のように兵士が立っていた。バージルは足を止め、それに倣う様に子供も足を止めた。

「城に用があるのか？ 無理だぞ、この門は城から使いが出てくる時しか開かない。それだって滅多にないんだ」

そういいながら、子供は視線を門から側にいるバージルに移す。

「あれ……？」

しかし、先ほどまでそこにいたはずの彼の姿はなかった。背後を振り返るが姿はない。

「何処に行ったんだ？」

子供があたりを見渡すのを、バージルは遙か頭上、門の上辺に足をかけながら見ていた。

その頭上、目玉に羽をはやしたような存在が二人を見下ろしていた。

○○○○○○

バージルが城の内部へと歩みを進めている最中、城内にある書斎ではなく人形>が山のように連なる書物の間に顔を出し、手に手帳を持ちながら本の文字をなぞっている。

そして、ある記述にギョロつかせていた単眼が止まった。

「スパード……」

人のものとは違う低いような高いような独特な声を発した。人型はその単語を何度も目にしていった。

そして別の書物に視線を移す。そこには挿し絵が描かれており、門のような建造物の前に獣のような生物が描かれている。そこにもスパードの単語が書き込まれている。

不意に、人型の肩に羽虫のような羽を持った目玉がとまる。それは人型の肉体にとけ込むように同化すると、人型はハッと面をあげ

た。

「誰かが城に入り込んだな。何人たりとも、この城に入ることは禁じているというのに……！」

書斎を飛び出しながら人型は唸った。どことなく焦ったようにも見える。

○○○○○○

「あいつ、あの出血じゃぶっ倒れちまうに違いない。早いとこ探さない……」

子供は体に纏う外套を抱き寄せながら思考した。

あの男は城に入りたがっていた。なら、どこから城に入り込んだのかもしれない。

そう推理しながら視線を城に向ける。城は高い城壁と門に囲まれているために鳥でもない限り越えるのは不可能だと判断した。堀も掘られているので上るにしても手間がかかる上に目立ってしまう。

ならいったいどこから？

そう思案する子供の視線の先に排水口の出口が見えた。城で使われた水を流すそれは鉄の柵で塞がれているはずだが、その排水口の柵は内側からひしゃげるようにして開いていた。

「……あそこからなら城に入れるか」

そういうやいなや。子供は排水で汚れるのもかまわずに堀へと飛び込み、排水口へと体を移した。

○○○○○○

数十メートルはあろうかという門を“飛び越えた”バージルは城の内部へと足を進めていた。

赤い絨毯が引かれた広間の中央には巨大な階段があり、左右に分かれて上階へと続いている。その分かれ目にはいくつかの肖像画がかけられている。

そのうちの一つ、特に大きな肖像画には三人の人物が描かれている。中央には髭を蓄えた貴族の格好をした男性、それを挟むように微笑みを浮かべた麗人と幼い少女が描かれていた。

バージルは階段の手前まで歩を進めると、その場で振り返った。

視線の先、燭台の蝋燭が照らす広間の影から門の前で目にした騎士達が手に武器を携えて歩み出る。そして、天井からは単眼の複眼をもつ蟲のような生き物がボトボトを音を立てて落下し、バージルの周囲を取り囲んだ。

「どうやら無駄足ではなかったようだな」

あからさまな『怪異』を目の当たりにし、口から思わず言葉が漏れる。求めていたものだ。魔女という怪異を求めて巡り会った怪異。少なからず期待が持てた。

周囲を取り囲む数匹の蟲が高価な絨毯を蹴ってバージルの飛びかかる。

露出した腹、足の付け根が縦に裂けると鋭く尖った歯が並ぶ口が開いた。金切り声のような奇声を上げて牙をバージルの肉を抉ろうとさらに口を大きく開いた。

その開かれた口に浅葱色に光る剣が突き刺さる。弾かれたように吹き飛ばされた蟲は背後にいた剣士たちにぶつかり、その剣によって串刺しになった。

騎士たちは浅葱色の剣を引き抜き、鳴き声を上げる蟲諸とも投げ捨てる。剣は床にふれると同時に砕け散り、蟲は断末魔の悲鳴を上げた。

「少しは楽しませろ」

武器を構える騎士たちを牽制するようにバージルの周囲を幻影剣

が取り囲み、その浅葱色の切っ先を異形へと向けた。

第七話 牢獄の怪物

「くせえ……匂いがこびり付いちまった」

下水から城へと潜入した子どもは外套にこびり付いた匂いに顔を歪めた。下水道の先は城の地下へと続いていた。粗末な靴は下水で汚れ、長い外套の裾も同様だった。

付近には歩哨や巡回する兵士の姿は地下には無い。

忍び込んだはいいものの、内部の構造など知る由もないので手当たり次第に歩きまわる。

「おッ……」

ジメジメと湿った空気が漂う廊下を通りながら周囲を見渡していると、途中で囚人を繋ぐ牢屋を見つけた。目当ての人物が城に入っただとしたら、兵士に見つかり拘束されているかもしれない。

そう思い、入り口側の牢から一つずつ覗いていくが、銀髪の剣士の姿は無かった。

牢屋の内部には用途がわからない小さな桶が置いてあるだけで、石を組み合わせた壁だけ周囲を覆っている。

「どこにいったんだろ……おッ」

半ばあきらめながらも最後の牢へとたどり着く。その牢だけは格子状の鉄の扉が閉まりきっていた。閉じられているだけかと思ったが、中から僅かに何かが擦れるような音が聞こえる。

「誰かいる……」

小走りで扉に駆け寄って中を覗き込む。その牢には他の牢とは違い、鎖が巻き付けられている。鍵で閉められる扉を幾重に鎖で絡め、出られないようにしているようだ。

通路には小さな灯りが灯っているだけなので牢屋の奥は覗くことができなかったが、ぼんやりとした人影が壁に寄りかかっているのが見えた。

人影もこちらに気づいたのか、影の中から僅かに照らされる通路

側へと歩み出る。

当たりか？　と思いながら子どもが口を開こうとするが、

『去れ』

「ッ!？」

人影が灯りの中に入ってきた瞬間、恐怖のあまり口を飛び出そうとする悲鳴を手で押さえることで防ぐ。

そして、逃げるように急ぎ足でその場を後にした。

子どもが見たもの、それは影であった。人の形をした化け物。獣が恐怖を感じるような悪寒が子どもを襲ったのだ。

今すぐに逃げなければ。

足下が僅かに見えるほどの薄暗い灯りの中、石畳の隙間に足をひっかけながらも、がむしゃらに走りながら視線をあちこちに向ける。これ以上地下には居たくなかった。

外套の下衣服が汗でぐっしりと濡れた頃になってようやく、1階へと続く階段を上ることが出来た。

「何なんだよ……ん？」

息も絶え絶えに階段を上りきった所で音が聞こえた。金属同士がぶつかり合うような音に、水っぽい何かが落ちるような音が側の扉から聞こえる。

記憶に残る探し人は剣を携えていた。もしかしたら兵士と争っているのかもしれないと考えて、扉を少しだけ開けてのぞき込む。

目の前に、グチャリと何かが飛び込んできた。

「ヒッ!」

人の頭ほどであろうかという大きさの蟲に、今度は悲鳴を押さえることができなかった。思わず口を押さえるが、蟲は複眼に子どもを映していた。飛びかかろうと脚に力を込める。

だが、蟲はその場から飛び立つことはなかった。

飛来した浅葱色に光る“幻影剣”が蟲の体に次々と突き刺さり、地面に縫いつけられたからだ。蟲はどこから発しているのか、鳴き声をあげて無数に生える足を蠢かした。

「え……」

蟲から視線を外す。見上げた先では片刃の長剣を抜き打つ銀髪の剣士の姿があった。

○○○○○○

足を狙って突かれた槍の穂先を鞘で弾き飛ばす。背後から振りおろされた剣は振り返ることなく同様に鞘で剣の腹を打ち据えた。

はじかれた衝撃で体勢を崩した騎士たちの隙を逃すことなく閻魔刀を抜き打ち、胴体を二つに分かつ。

分厚い鎧ごと体を両断された兵士たちは血をまき散らしながら四つの肉塊へと成り下がった。

「――雑魚が」

バージルは鞘に血振りした刃を納めながら吐き捨てる。周囲には既に立ち上がるものは存在しなかった。半ばから切断された槍が転がり、強固であるはずの鎧の破片が散らばる。

兵士達の遺体には五体満足なものはごく僅か。幻影剣で壁に縫いつけられた蟲はいまだに細く長い足を動かしている。

胴を切り裂かれた兵士の断片からは血が滴り、臓物が絨毯を赤くぬらしていた。

変化が起きる。

兵士の鎧の下に詰まっていた肉体がドロドロに溶け始めた。やがて流れ出す赤い池を覆うように広がった液体は空間にとけ込むようにその色を薄め、鎧の切れ端を残してその姿を消した。

壁に縫いつけられた蟲も同様であった。縫いつける肉を失い壁に

突き刺さったままの幻影剣が役目を果たし、ガラスが碎けるようにその姿を消した。

それを見て、バージルは肖像画が並ぶ階段を上り始める。並んだ絵に描かれた者たちの微笑みが彼を迎えた。

○○○○○○

少年は葛藤した。

牢獄の化け物もそうだがこの城は得体の知れないものが蠢いている。人間が一人として存在しないのだ。このままだといつ襲われるかわからない。この城から抜け出そうにも、下水道のある地下にはあのおぞましい生き物がいる。オマケに蟲のような生き物や兵士まで彷徨っているのだ。一人で戻ろうなどとは考えられない。

なら……あいつか？

階段を上る、銀髪の名も知らぬ剣士を見る。剣については明るくないが、素人がみても圧倒的な強さであった。彼ならば怪物相手でも敵ではないだろうと。

そして光る剣。

魔法のようなそれは、少年の未知の恐怖よりも好奇心を刺激した。もっと知りたいという欲求も相まってか、バージルについていくという結論に至った。

（いきなり斬られたりしないよな？）

鋭い眼光と近寄りがたいオーラを発しているが、人間なのは彼だけだ。化け物よりマシだろうと判断して階段を上っていく後姿を追いかける。

「ねえ、ちょっと」

少年が声をかけると同時に、剣士の肩のあたりに光が集まる。光は剣の形を取り、切っ先を子供に向けた状態で放たれた。

「ひッ!？」

幻影剣は空を切り裂き、子供のフードを掠めた。そして、子供の背後から飛びかかろうとした蟲を貫く。

衝撃でフードが外れ隠れていた顔が露わとなる。黒い髪は伸び放題で放置されている。そして長い前髪で隠すようになっていた顔には、大きな傷があった。左目を覆うような三本の切り傷が目を潰し、端正な顔立ちを醜く歪めている。

「うわわッ!」

あわててフードで顔を隠しながら蟲の死骸から距離をとる。バージルはそれを見ようとせず、階段を上り続けた。

「あ、ありがとう……」

助けられたと悟り、少年はバージルの側に駆け寄り、礼を言った。バージルは歩みを止めずに前だけを見ている。

「お、俺はアルカって言うんだ。あんたは？」

相手にされないことにもめげずに少年、アルカは見向きもしない銀髪の男、バージルに話しかける。

予想通りというか、返答はなかった。

「あゝ……じゃあ剣士様って呼ぶぜ」

相手にもされていないのはいささか腹が立つが、とりあえず切り捨てられるような拒絶はされていないことにアルカはホッとした。

落ち着くと同時に思う。

なぜ階段が上がっているのかと。

(この城を出ようとは思わないのか?)

彼はまるで“怪異”に怯えた様子がなかった。得体の知れない存在が動き回っているのに、なぜ先に進もうとしているのかが理解できなかったのだ。

そしてもう一つ。

怪我をしていたはずなのに、平然としているバージルが異様に思えた。ただの勘違いだったのかと、自分の記憶を信じられなくなってきた。

疑問に思いながらもアルカはバージルと共に階段を上る。彼らの歩いた階段には、赤い滴が点々と残されていた。

○○○○○○

城の内部は一定の間隔で設置された灯りによって照らされている。壁に設置された油の詰まった皿の中央にある芯が油を吸って炎を生み出す仕組みだ。それに油虫のような蟲が尻を向ける。

子犬ほどの大きさの蟲は尻の先から玉のような滴を生み出し、油受けの皿に注いでいる。

蟲たちは側を通り抜ける二人には見向きもしない。先ほど襲ってきた蟲とは違い襲うようなことはないようだ。

廊下を進む内に僅かに開いた扉が見えた。隙間からは光が漏れている。バージルはその扉に手をかけて中に入る。アルカも周囲をキョロキョロと見回しながら続いた。

「書斎か。本がたくさんだ」

アルカは壁一面に設置された本棚に詰まる書物の山を見て声を上げる。書斎部屋の中央には机とイスがおいてあり、いくつかの書物が開かれておかれていた。

バージルは机の上に置かれた書物に目を通す。見たこともない文字でかかれた書物には挿し絵が描かれている。絵には石造りの門のような建造物が描かれており、その前には狼のような獣の姿があった。

ページをめくり、新たに挿し絵が描かれているところで手を止める。そこには剣士が描かれていた。剣士の体には羽が生え、手には無骨な大剣を下げている。バージルはそれに見覚えがあった。

剣士は黒い装束の人物と並ぶようにして描かれている。その人物は手に杖を持ち、ローブに大きな三角帽子をかぶっていた。他に挿

し絵がないかとページをめくる。

「見たこと無い字だな」

いつの間にか側にきていたアルカが言う。その言葉に、バージルは始めてアルカに向き合った。

「読めないのか？」

初めてアルカに対して答えたバージルにギョツとしながらも、アルカは答えた。

「学はないけど、簡単な読み書きぐらいは出来るよ。でも、こんな文字見たこともない。昔の言葉かなんかじゃないの？」

「読める者は？」

「――さあ？ この本を集めてる奴なら読めるんじゃないの」

読めない本を集めるバカもいないだろうし。と、アルカは手を頭の後ろで組んで答える。バージルは本を手にしぼし思案すると、廊下へと続く扉へと向かった。

「もしかして、“読める奴”を探してまだこの城を彷徨くのか？
ねえ、この城はやばいって！ バカでかい虫に消える死体。絶対に普通じゃない。すぐに城を出ようぜ！」

「一人で行け」

にべも無い。アルカのバージルに対する印象はそれにつきる。かつてこれほどまでに関わりづらい人間を見たことがなかった。多分これからも。

帰れるものならとつくに帰っている。しかし、一人で怪物がいる牢獄を通る道を通る気はしなかった。

「第一、喋れる奴なんかないじゃないか。……あ」

口について出た言葉で思い出す。

思い出したくもなかったことでもあった。

「――牢屋の怪物」

バージルが反応して振り返る。鋭い眼光に怯みながらも、アルカは口を開いた。

「地下の牢屋に化け物が居ただけど、そいつは喋ってたぜ。そい

つなら、もしかしたら――」

「案内しろ」

本を放り投げるバージル。本はアルカの胸元へと落ちた。思いの外強い衝撃に落としかけるも、なんとか持ち直す。ずり落ちそうになるフードを掛けなおしながら、余計なことを言ってしまったなど少し後悔した。そして思う。

（そういえば……なんであの化け物は牢屋にいたんだろう？）

蟲のような生き物が自由に歩き回っているのに、何故あの人型が拘束されているのか理解できなかった。

○○○○○○

二人は地下の牢獄へと歩みを進めていた。先ほどは見かけなかった油虫がこちらの灯りに油を注いでいる。強まった火の灯りに照らされた通路はアルカが来たときよりも明るく見えた。

「う……」

直ぐ側を通り過ぎた油虫から大袈裟に離れるアルカ。蟲は人など居ないという素振りで通路を歩く。

しかし、後続のバージルの前に来た時にビクリと体を振るわせると壁に登り始め、通路をあけた。

「ここだよ」

油虫が遠巻きにする中、アルカは目当ての場所にたどり着き、バージルを促す。

幾重の鎖で雁字搦めにされた扉がそこにはあった。石造りの壁に鉄格子がはめ込まれた簡素な牢ではあるが、強固な作りであることに代わりはない。

バージルはその前に立ち、鍵のかけられた牢獄の中に立て膝をついて座り込む存在を睨む。足の先から頭までが黒いそれは人影が形

を持ったような容姿をしており、顔の部分についての線のような口が動いて言葉を発した。

『立ち去れ』

腹に響くような声質のそれは人間のものとは違ったものであったが、同時に知性を感じさせるものであった。アルカが怯えたようにバージルの影に隠れる。

「口は聞けるようだな」

バージルは牢獄の化け物に向かって怯えた様子もなく話しかける。言いながら、背後にいたアルカが持つ本を受け取り、目のない顔に向かって翳した。

『——ッ！？ その本は……』

翳された本を“感じとった”異形の顔が歪み、目玉が浮き出てくる。顔の大半を占める大きな単眼は本に釘付けになった。

「聞かせてもらおうか。この本に書かれている“スパードと魔女”について」

バージルは威圧するように、言葉を発した。

第八話 使徒

“使徒”という者はどこにでもいる。

ガッツの使徒に対する印象はそれだった。例えるのならば、血肉に群がるウジ虫。

ガッツは眼下のヘビの化け物を見下ろす。コブラのような使徒の頭には無数の矢が突き刺さり、炎に包まれて悲鳴を上げている。胴を切り裂いても死なず、焼かれながらも生きている。

ガッツの手には、血と臓物を絡み付かせた大剣<ドラゴンころし>が握られている。自身もまた傷だらけで、血にまみれていた。

確かに使徒は強い。生け贄によって自身を人外へと変えた奴らはゴキブリのような生命力を持っている。

だからこそ、苦しむ時間も長い。

燃え盛る使徒の悲鳴を聞きながら、ガッツは新たな獲物を求めて歩みだした。その顔には獰猛な笑みが浮かぶ。

無数の使徒を狩り始めて、ある共通点に気づいた。

使徒の多くは人肉を喰らう。まるで捨ててしまった人間という存在を求めるように。あるいは決別するように。

コカ城を根城にする盗賊団の首領である先ほどの使徒は領主を脅してエサを求めている。

エサとして要求していたものは人。子供の肉だ。

ガッツがその使徒を見つけたのも、使徒の猟奇的な嗜好が故だった。

彼の首筋に刻まれた“生け贄の烙印”は悪霊などの魔の存在を引きつける。同時に、ガッツも烙印の発する痛みによって魔の存在を知覚することが出来るようになっていた。

『ま、待ってくれ！ 死ぬのは嫌だ！ 待って……助け——』
悲鳴をあげて炎に包まれる使徒の断末魔を背に、ガッツは歩みを進めた。

ゴトーの鍛冶小屋から旅を始めてからの日々は単純だった。
烙印の反応に引かれ、奇怪な噂をたどって使徒にたどり着く。そして殺す。その繰り返しの日々であった。

だが、今回は妙なものにまとりつかれた。

“エルフ”だ。

パックという名の妖精は、酒場で盗賊によって投げナイフの的にされていた。その盗賊は使徒の手下であったため、ガッツは使徒を誘き出すために盗賊を惨殺した。エルフを助けようとしての行動ではない。

周囲には村人と盗賊の死体が転がり、多くの建物が業火に包まれている。実質的な支配者である使徒を誘い出すために盗賊を殺したため、使徒が町を焼き払ったのだった。

ガッツは使徒を一匹殺すのに、町を一つ壊滅させたのだ。

使徒の断末魔に、尖った耳を押さえて小さな体を更に縮めるパツク。

その怯えたような声が耳に届いた。

「……^{ベルセルク}“狂戦士”……」

狂戦士。

使徒一匹を狩るために無数の死体を築き上げる様はそのように見えることだろう。

（——知ったことか）

口には出さずに吐き捨てる。

（ただヤツらを見つけ出し殺す。ほかの事は“知らない”。他人の戦いに巻き込まれて死ぬようなやつは最初から、生き抜く力のない“ザコ”だ。自分の命さえ自由に出来ないなら死んじまえばいい）
全てを奪ったゴッド・ハンドと使徒。奴らに対する怒りが。憎しみが。両足を支え、超重量の剣を振るわせる。

一切の容赦も、慈悲もない。彼を復讐のために、その身に狂気を纏わせる。

復讐の旅はまだ、始まったばかり。

○○○○○○

蟲が徘徊する城の地下。そこには罪人を捕らえるための牢獄がある。その一番奥、施錠の上に鎖が巻き付けられた牢門を挟んだ異形と悪魔。

『まさか、読めるのか。それが――』

「もしそうなら、貴様などに用はない」

格子を挟んで向き合う異形とバージル。アルカはバージルの背後から異形を見つめる。恐怖もあるが、好奇心が勝った。

『ならば……なぜ魔女を、“スパード”を知っている。その本に書かれた文字は暗号そのものだ。読める者はいない。少なくとも、私以外には……ああ、そうか挿絵を見たのか』

納得がいったという様子で異形は檻の中で顎をさする。だが、直ぐに態度を改めた。

『いや……なぜ“名”を知っている。スパードの存在は“法王庁”によって隠匿されている。知っているのは極僅かな筈――』

「答えが違う」

鞘鳴りが牢獄に響きわたり、異形の言葉を遮った。いつの間にか、バージルの手には拔身の闇魔刀が握られていた。

『な……！』

怪物の声と共に頑強な牢に切れ目が生じる。

巻き付かれた鎖が耳障りな音をたてて切れ、斜めに切り裂かれた扉がずり落ち、同時に“異形の左腕”が落ちた。

残った肩口から溢れる鮮血が牢屋の壁を塗りつぶす。小さな悲鳴

がアルカの口から漏れた。

「牢の中に入って身を守ったつもりか。それとも、俺の言葉の意味が分からなかったのか」

淡々とバージルは告げる。拒否すれば次には異形の首が飛ぶと、容易に想像がついた。

だが、異形の視線は閻魔刀に注がれたままだった。

アルカはおっかなびっくりといった様子で落ちた左腕を見る。

そこで気づいた。

腕の断面からは血が溢れていなかった。僅かに落ちた床が赤く染まっているが、ほんの僅かだった。落ちた腕がそれだけの出血で済むはずがないのだ。

異変はそれだけではない。落ちた腕がボコボコと蠢く。

そして、腕の形が崩れた。

崩れた腕はドロのように形を変え、最終的にある形を取った。球体に近い胴体に細く長い足が生えたそれは、先ほど襲いかかってきた蟲そのものであった。

蟲は確かめるように脚を動かし、腹にある大きな口を噛み合わせて音を鳴らした。

「ひッ！」

その醜悪さに悲鳴が漏れる。

それに反応して蟲の複眼がアルカを認識する。蟲は開けた格子を乗り越えて、少年に襲いかかった。

口と脚を広げながら飛びかかる蟲。その無数の足が少年の頬を掠めたとき、蟲が叫び声をあげた。

「あ……」

蟲を止めたのは異形だった。残った右腕で蟲を掴んでいる。異形が力を込めると蟲は血しぶきと断末魔をあげ、“右腕に溶け込んで” いった。

『“私を” 守ろうとしたのではない。“私から” を守るためだ』
異形の切り落とされた左腕に変化が起きる。

内側から肉が盛り上がり、木の枝のように徐々に伸びる。枝は徐々に肉付き、新しい腕となった。その腕を確かめる様に顔の前で握る。

『この体……“使徒”として転生した私の体は無数の“使徒もどき”を生み出す。“私の意思に関わらずともな”』

異形は拳を強く握り、言葉を切って単眼でバージルを睨む。

『お前たちも見たはずだ。この城を巡回する兵士たちを。兵士たちは城への進入を止めているのではない。蟲たちが外に出るのを防いでいるのだ』

「領主様は——」

バージルの側から歩みでながらアルカが口を開く。異形の単眼がアルカを見据えた。

「領主様は……どうしたんだ。この城にいないのか……？」

『……城下の子だな。お前たちの知る領主は既にいない。この城にいるのは私と蟲ぐらいのモノだ』

アルカが言葉を紡ぐ前に、異形は口をにんまりと歪めた。人形が笑みを象っているような無機質なものに感じた。

『護衛をつけてやろう。すぐにこの城から出ていくがいい』

「いや……でも……」

アルカは口ごもりながらバージルを見上げた。異形はそれを見て更に笑みを深くする。

『ああ、そうだったな。お前は“そう”だった——』

「え——」

何かを知っているような素振りの異形は、アルカから視線を外す。

『だが、納得がいった。それだけの剣と腕があればここまでたどり着いたのも頷ける』

切り崩された牢の中で、異形は思い返すように、

『お前たち以外にも時折この城に入り込む者たちがいる。大概は城にある宝を求める盗賊たちだが、多くは兵に追い出されるか、奥に蔓延る蟲たちが喰らう』

異形は言葉をきって立ち上がった。牢は横幅が狭い割に天井が高い。異形は立ち上がるとバージルを見据えた。背はバージルよりも少し高い。

『残念だが、聞かせることも、本を渡すことも出来ない。それはいわゆる“異端の書”。知識を持つだけでギロチンが落ちる。そんな代物、渡すことが出来るはずがない』

「それだけか」

バージルの眼光を受けた異形が言葉が続ける。

『それだけではない。私にはどうしても必要なモノなのだ』

スリと、バージルが閻魔刀の切っ先を異形の首に向けた。

「この本には貴様の命ほどの価値があるのか」

閻魔刀の切っ先が異形の首に食い込む。食い込んだ刃先は肉を裂き、赤い血が溢れだした。

『ある意味では……な』

異形の笑みがより深く、より狂気を感じさせた。

『故に——』

異形の姿がブレる。アルカにはそう見えた。

ハードカバーの本がバージルの足下に落ち、音を立てる。

同時にアルカの目の前、バージルの閻魔刀の刃とぶつかりあう“何か”が火花を散らした。

『渡すことが、出来ぬ』

異形の腕の右肘から先、黒い皮膚が光沢を持っていた。それは金属のような質感を持ち、鋭い剣を模って閻魔刀と打ち合っていたのだ。

『命までは取らん。その本が必要なのだ！』

「……」

火花を散らせたまま、バージルは取り落としていた本をアルカに向かって蹴る。本は石畳を滑り、少年のボロボロの履物にぶつかって止まった。

「持っている」

バージルの有無をいわせぬ物言いに、言われるがままに本を抱えあげる。

『渡さぬッ!』

異形は生えた左腕をアルカに向ける。その黒い手のひらからは“目”が飛び出し、小さな羽を羽ばたかせながら飛び立った。

「うわッ!」

蟲は細く長いあしでアルカの被るフードを引っ張る。外見からは想像できないような力をもつ蟲はそのまま少年を中に吊り上げた。

バージルが舌打ち混じりに幻影剣を放つ。光剣は狙いを違わずに“目”を貫いた。宙に投げ出され、尻餅をついたアルカは痛みに顔をしかめながら早々に走り去る。

『魔術……!?!』

幻影剣を見た異形の口が歪む。それは笑みではなく、驚愕のように見えた。

「よそ見をされていていいのか?」

異形の疑問は剣によって妨げられた。

アルカは追いついてられるままに城の奥へと辿りついていった。どこをどう走ったのか覚えていない。目の前にあった大きな鉄の扉を、力を振り絞って押し開けて中に入り込み、扉を閉めた。

「……ここは?」

本を抱え直し、荒い息づかいのまま室内を見渡しながら部屋の中奥へと歩みを進める。

部屋の明かりは高い天井付近になる窓から差し込む光のみ。日が沈みかけているのか、やや光が弱く感じた。照らされた室内は広く、庶民の家がスッポリ収まるほどだ。

そして、そこかしこに転がる異様な代物が部屋の不気味さを際立たせている。

「――拷問部屋か？」

アルカの言葉通り、室内には拷問で使われるような棘付きの拘束椅子。扉の内側に棘が仕込まれたアイアン・メイデン。なぜが破損しているギロチン台。そのどれもが血にまみれていた。

そして、そこには血を啜る無数の蜘蛛のような蟲がいた。

「……またかよ――」

悲鳴も出ないといった様子で呟く。

その声をもかき消すように、扉を突き破った異形が姿を現した。

『ぬう……』

唸りながら両腕を無くした異形がドアの残骸をどかしながら立ち上がる。立ち上がる間に新たな腕が生えそろうた。

『貴様……一体何者だ？』

異形の問いは壊れた扉から入ってくるバージルに向けられていた。

『この臂力……それにあの“光る剣”……ただ“人間”ではあるまい』

「それを聞いて、貴様はどうするつもりだ」

閻魔刀を構えるバージル。異形の視線はその刀に注がれた。

『――殺さずに止めるのは無理だと判断した』

異形の腕が再び蠢く。

新たに剣を生やすのかと思いきや、今度は剣の形が違った。融合した両手首から先からの伸びるのは柄と鍔、そしてダラリと下げられた腕から床にまで長く伸びながら緩やかに反りかえった細く長い刀身はバージルの閻魔刀に酷似していた。

変化は止まらず、腕をゴツゴツとした突起が覆う。それは長方形のプレートがいくつも並んだような代物で、肩から剣として変化した部分までを覆った。蛇腹のように腕を覆うそれは、さながら鎧のようであった。

「猿真似か……形を変えただけで対等になると思っているのか」

『――学んでいるのだ。“何度も斬られていれば剣筋も覚える”』

「なら、“コレ”もか？」

バージルの周囲を幻影剣が覆う。四本の浅葱色の剣は異形へとその切っ先を向けた。その内の一つが空を引き裂いて異形に迫る。

『――不格好ではあるがな』

異形の背中の一部が盛り上がる。そこから突き出すのは剣。いや、剣の体を持った蟲だった。

剣は幻影剣とほとんど同じ大きさで、柄にあたる部分から伸びる細く長い六対の足と二対のハネ、そして柄頭に目玉を持っていた。

剣の体を持つ蟲、“剣蟲”は重そうに体を宙に浮かび上がらせると、体を縦に回転させ、振り下ろすように剣を振り、迫る幻影剣を叩き落とした。

剣蟲はそのままアルカの方へと飛んでいき、少年の背後から迫っていた蟲を串刺しにした。群がってきていた蜘蛛のような蟲を剣蟲が威嚇するように刃先を向ける。

『この蟲共は見境がない。血の匂いを嗅ぎつけば生きていようと死んでいようと群がってくる。貴様にもな』

バージルは無言のまま異形を睨みつけた。

『ここまで漂ってくるぞ。貴様の体から染み出す血臭が。ここに来るまでに怪我でもしたのかもしれないが、いつまでも剣を振るうことはかなわないはずだ』

生やした刀をバージルに向ける。その体からは無数の剣蟲が這いだしていた。

『貴様に残された時間は僅かだろうが、私は違う。人の一生を何度も繰り返すほどの時間がある。――途方もないほどにな』

「途方もないだと？ 笑わせるな」

激烈な踏み込みと共に距離を詰めたバージルと異形の剣がぶつかり合い、拮抗した。

「貴様の体、“前より縮んでいる”ようだが」

罅迫り合いのまま両者の顔が近づく。その視線は同じ高さにあった。牢で会ったときには異形の方がバージルを見下ろしていたはずであったのに。

『……ああ、そんなことは“私の生死には関係がない”』
異形の言葉に続くように、無数の剣蟲がバージルへと殺到した。

○○○○○○

幻影剣と剣蟲が空で互いを潰し合う。幻影剣が蟲の目玉を貫けば新たな蟲が幻影剣を砕く。

剣の撃ち合いの中、バージルと異形の鏢迫り合いが激しさを増した。

異形が体ごと押し込むように閻魔刀を押し退ける。バージルが下がりながら閻魔刀を振るって腕を切り落とそうとするが、ゴツゴツとした鎧に刃先がずれ、いくつかのプレートをそぎ落とすだけにとどまった。はがされた鎧も斬り合う内に再生される。

『私でも見切れるほどに剣が鈍っているな。先刻より血の臭いが濃くなっている。よくもその状態で動けるものだ』

異形の称賛の言葉に、バージルは閻魔刀で答えた。剣を振るう度に彼の袖口から紅い滴が舞う。それは徐々に床を汚し始め、血溜まりを作り始めた。

「……」

言葉に出さずとも、バージルは自分の体が血にまみれているのを感じていた。幽体につけられた傷が肉体に干渉して傷を開かせる。

長時間の戦闘は確実に彼を弱らせていた。

（長引けばこちら不利……か）

短期決戦では情報を聞き出す前に異形を殺してしまうかもしれないが、やむを得ない。

「聞くが、貴様は首だけになっても生きられるのか」

何度目かの撃ち合いの最中、側を通り抜けた剣蟲を閻魔刀で貫き、そのまま払うようにして剣蟲を異形に投げる。額に突き刺さった剣

蟲は異形の身体に吸い込まただけだった。

『私が死ぬことなど、想像も出来ぬな』

「そうか」

バージルは異形の剣をはじき、闇魔刀を鞘に収める。

「死ぬなよ」

腰を落とし、鋼を斬り裂く一閃の構えをとった。

異形には白刃のきらめきしか見えなかった。

異形はとっさに首を庇うように剣をかざした。そうしたのは叩きつけられた強烈な殺気と先ほどの問答によるモノだった。

「——ッ!? 違う、この一撃は——」

居合いによって切り取られたのは異形の剣。首ではなく、武器を狙った一撃であった。

剣がその威力を発揮するのは刃先が十分な速度に達することと、対象を斬り裂く力が重要である。バージルの攻撃は鉄をも斬り裂くが、その前に剣で防ぐことで威力を減退させているのだ。だからこそ打ち合えていたのだが、はじめから武器を狙っていたのであれば防ぎようがない。

（狙いは二撃目——）

バージルが返す刀で異形の首を刈り取らんと狙う。異形は首元に迫った刃を頭部に刀剣のような二本の角を生やし、頭突きをするように受け止めた。

（凄いだ——）

そう思い顔を上げた異形の目前には、宙を漂う幻影剣の群がその切っ先を向けていた。

『しまッ——』

声は飛来した幻影剣が口を引き裂いたために途切れた。

幻影剣の一斉射出。

飛来する幻影剣を新たに生やした剣で数本を砕くが凌ぎきれずに体を貫かれる。一本の幻影剣が体を貫いた衝撃で体が浮き、後続の全てが深々と体に食い込んだ。弾かれるように壁に叩きつけられ、壁に縫いつけられる。

剣蟲を飛ばして牽制するも、数が違いすぎた。

雨のように降り注ぐ幻影剣を剣蟲は凌ぎきることが出来ず、その体を散らせていった。

「貴様は言っていたな。首をはねようが死なないと」

悠々と、バージルが壁に縫いつけられた異形へと歩み寄る。その手は鞘に納められた閻魔刀に伸びた。

『よせッ！ そんなことをすれば——』

「知恵を借りるには首から上があればいい」

閻魔刀の鋭く研ぎ澄まされた刃が、縫いつけられた人型の首を刈り取った。

『なんと——』

首だけになり、宙を舞ながら異形は言葉を漏らした。

○○○○○○

日が沈んだ城下町。酒場で飲み明かす男達を除いて住民達は寝静まっていた。

「ういゝ……飲み過ぎちゃったかな」

酒瓶を手におぼつかない足取りで道を歩く酔っぱらった男が、赤らんだ顔を手で覆いながら呟いた。

「んあ？」

男は視線の先、住居の扉が開いて中から寝間着姿の住人達が出てくるのを見た。

こんな自分に軽装でいる彼らを不審に思っていると、その隣の家からも寝間着姿の住人が出てきた。それも一軒だけではない。視界に入る殆どの建物から人々があふれだし、通りを埋め尽くした。

この暗がりの中、灯りも持たず、中には裸足のままでいる者も居た。その内の数名が手に何か動くものを持っている。

それは鶏や豚などの家畜であった。紅く染まった肉の塊たち。彼らの口元もまた紅く染まっている。

彼らは喰らっていた。

泣き叫ぶ家畜たちを。

まるで表情というものを忘れてしまったかのように。

「う……お……」

異様な何かを感じ取った男が持っていた酒瓶を落として割ってしまいながらも、少しでも離れようと通りの隅へと転がり込んだ。音に反応して何人かが振り向く。

その内の一人、一番側にいた少女が歩み寄る。割れた酒瓶の破片が素足に突き刺さるが、その表情は変わらずに無表情のままであった。

「なん——」

言葉を紡ぐまもなく、男の首筋に少女が噛みついた。

喉笛も引き裂かれた男は悲鳴を上げることもなく、その目を驚愕と恐怖に染まらせながら血を噴出した。

少女の後ろに控えていたものたちも一斉に襲い掛かる。腕が、足が、内臓が飛び散る。

それは伝染するように、町を悲鳴で覆った。

人が人を喰らう。それは一方的で、容赦というものがなかった。

悲鳴がなくなる頃、口元を紅く濡らした住人達は、何かに取り付かれたかのように通りの先、城へと向かって歩みを進めていた。

その無表情であった顔には、いつしか笑みが浮かんでいた。

第八話 使徒（後書き）

101219…1から8話まで微修正しました。

第九話 偽り

頭を失った異形の体が、力を失ったかのように壁に張り付けにされたまま動かなくなる。それに続くように、頭が遅れて固い石畳に落ちた。

切断された首から流れ出る紅い血が軌跡をなぞり、緩やかな弧を描く。その線は闇魔刀を納めたバージルの足下で止まった。

見開かれていた異形の単眼が、ギョロリと動いた。

『貴様……！』

牙をギラつかせながら、異形はバージルを見上げた。

吐き出された言葉には怒気が込められていた。

首を刈り取られればそれも当然ではあったが、首を切り離された状態で生きながらえる存在など、そうはいないだろう。

「確かに、死にかけているようには見えんな」

怒気をはらんだ異形の言葉に、バージルは見下すように視線を下ろした。

周囲には戦いの余波に巻き込まれ絶命した蟲の死骸が転がっている。その死体も、徐々に空へと消えかかっていた。

『何をしたか、わかって——』

「自分の置かれた状況ぐらいは、把握しているだろう」

異形の言葉を遮り、バージルは生首に足をかけた。

見下ろす視線が鋭く、冷酷な気配を醸し出す。

「貴様をこのまま虫のように潰すのは容易いが、それでは“加減”した意味がない」

戦闘の最中に放った幻影剣の雨、そして首切りの一撃も、長引く戦闘を打開するための手段であった。

しかし、それで異形を殺してしまっただけでは意味がない。

この戦いは“勝つため”のものではなく、“情報収集”が目的な

のだ。

壁に縫いつけられた異形の胴体が、弛緩させていた体を揺するよう
に激しく動き出す。だが、幻影剣は深々と突き刺さったまま、体
を拘束し続けていた。

ミリミリと偉業の頭蓋が軋み、僅かに異形の瞳が顔からはみ出し
た。

それを見ながらも、バージルは異形の口から出てくるであろう言
葉は、ある程度预期できた。

命乞いか、あるいは怒りの言葉か。

再生——と言う言葉の範疇に収まるには些か桁外れな異形の力は、
今になってやっと、その力を發揮できないでいるようだった。首を
切断された異形は首の下から体が生えるわけでもなく、その傷をふ
さぐように肉が盛り上がっていた。

その意味するところは“再生が出来ていない”という事実。

これは再生力が尽きたのか、あるいはもっと別の理由なのかは分
からなかったが、負けないという異形の自信を打ち砕いたはずであ
る。

『今すぐこの城から出ていけッ！』

だが、異形の口からでた言葉は、本の内容でも呪詛の言葉でもな
かった。

怒声……というより、懇願のように聞こえた。

「俺の話を——」

『＜奴ら＞が来る！ 今すぐ逃げなければ巻き込まれるぞ！』

首だけになりながらバージルの身を案じる異形に、バージルは虚
を突かれたように僅かに眉を歪めた。

ひどく怯えたような様子でもある異形が口にした＜奴ら＞とは何
か。

それを聞く前に、いつの間にか側に来ていたアルカが生首に言葉
を突き刺す。

「——あんたが喰ったのか」

吐き出した言葉には怒りが込められていた。

アルカには異形の命乞いに聞こえたのかもしれない。

彼を守っていた剣蟲は先ほどの戦闘で碎け散り、周囲を蜘蛛のような蟲が囲っていた。

だが、その蟲たちは先ほどのように襲うことはせず、ただその様を見ているようだった。

「……城下の人たちは領主様を信じてる。だから、この街から出ていく人がいても、残る人がいるんだ」

力強く、領主に対する尊敬が込められた言葉は異形の口を動かし、た。

『——領主は、そんな存在ではない』

アルカに視線を移した異形はそう告げた。

『醜く、利己的だった』

言葉は少なく、口にするのを戸惑っているように見えた。

「なんでそんな口が利ける！ お前みたいな化け物が、領主様の何を知ってるって言うんだ！！」

息を荒げながら、アルカは怒鳴り散らした。いつしか手を左目を覆うキズを押さえ込むようにしている。

『それは……』

異形が口を開く直前。

破壊された拷問部屋の扉から何かが飛び込んできた。

それは部屋の中央、ギロチン台までとび、金属音を響かせて突き刺さった。

それは城を徘徊していた兵士であった。ひしゃげた金属、鎧から赤い血が漏れだしている。まるで大きな何かに弾かれたような有様だった。

「次から次へと……」

苛立ちを隠そうともしないバージルの声が静まり返った室内に響く。

その視線の先、城下で見かけた領民たちが、そろそろと拷問部屋

へと連なるように入ってきた。

弾き飛ばされた兵士をみる限り、領民たちが兵士を弾き飛ばしたようだ。鎧を纏った兵士を軽々と扱う様を見るに、“ただの”人とは違うようだ。

『ああ……“終わり”が――』

悲痛な声を絞り出す異形は目を背けるように瞳を閉じた。瞬く間に、瞳が消え失せてノッペリとした顔に戻る。

「な、なんで、町の人が……？」

息も荒く、アルカが呟く。いつしか、傷口を押さえる手から血が流れ出していた。

領民は虚ろな目をしたまま、一人、また一人の部屋へと足を踏み入れる。部屋に差し込んでいた月明かりが先頭の少女を照らす。

その小さな口にはひきつるような笑みを浮かべ、血で赤く濡れていた。

『＜もどき＞には、私が命令した行動しかないものと、本能として動き回るものがある』

バージルは足下からの声に耳を傾けた。首は瞳を消失させたまま、口だけを動かして声を発した。

『私と同じだ。＜笑み＞しか浮かべることが出来ない。感情というものがない』

室内には10人の村人が並んでいる。彼らは二つにグループを分かつと、バージルの前で手を取り合つた。

『奴らは、“私を死なせてはくれない”』

ドロリと、輪郭がぼやける。ぼやけたのは異形ではなく、手を取り合う村人の体だった。

触れあっていた手が互いに結びつき、溶け合う。形を保っていたのは彼らの衣類だけであった。着られていた衣服が体を失い、ドロドロに溶けた領民たちの足下に落ちる。既に人としての形を失ったソレは、やがて別の形を成し始めた。

『この町に、＜人間という存在＞は殆ど居ないのだ』

バージルたちの前には、何時しか巨大な蜘蛛のような存在が立ちふさがっていた。

『キィィィィァー!!』

蜘蛛の胴体に人の体が生えたようなソレは、折りたたまれた顎を蠢かせ、大きく口を広げて奇声を発した。生えた人の腕は鋭く、異形のように剣を象っている。頭部には紅い複眼が乱雑に生え、バージルを見据えていた。

胴体から生える四対の足は刃のように鋭く、歩くだけで石の床を削る。足先を石畳に食い込ませながら、巨蜘蛛はバージルに襲いかかった。

雨のように降り懸かる無数の剣足を交わし、一つを踏みつけて跳躍する。人の胴体の部分の高さに達すると同時に、左手に握られた閻魔刀の柄に右手が伸びた。

拔身を見せぬ居合い切り。不安定な宙にいるにも関わらず、その一撃は巨蜘蛛の剣と化した腕を首諸とも斬り裂いた。

駄目押しといわんばかりに二太刀目を放つ。気合いと共に繰り出されたのは渾身の一撃に、胴から長い腸をバラマきながら、巨蜘蛛は壁に叩きつけられ、紅い花を咲かせた。

着地と同時に、もう一体の巨蜘蛛が尻ぐように長い足を振るった。バージルは僅かに身を反らせ、鼻先を刃が掠めるのを待ってから巨蜘蛛の体の下へと突き進む。同時に、閻魔刀を腹に突き刺した。

勢いを殺さずに駆け抜ける。突き刺さった刃が腹を裂き、内蔵と大量の血をまき散らせながらその場に倒れ伏した。

『……なんとも、凄まじいものだな』

何時の間には、異形の首から蟲のような小さな脚が生えて、首だけとなった体を支えている。その声には驚嘆のような響きが含まれていた。

『どうやら、ここまで入り込んだのはその者達だけのようだな。私の兵士たちが領民たちを押さえているのだろうか……時間の問題だ。すぐにここまで来るだろう』

「奴らは、貴様を目当てに群がってくるのか？」

バージルの問いに答えようと異形が口を開こうとする前に、直ぐ側で声が聞こえた。

「あ……が……!？」

そこには座り込みアルカの姿があった。フードで隠れた左目を覆う傷を押さえ、呻いている。

「あ……ぐ……!」

アルカが低く、唸った。

無くなった左目を抉られるような激しい痛みアルカを襲っていた。激痛のあまりに、たまらず座り込んでしまう。

冷や汗が止まらず、ボロボロの外套を濡らしていた。

「……………」

バージルは沈黙したまま、注意深くアルカを観察した。異変を察してのことではなく、どこか当然の出来事のように傍観を決め込んでいる。

「俺……俺は……」

アルカはうずくまりながら、顔の傷を押さえた。顔を抑える指の間から、何かが盛り上がるのが見えた。

紅い飛沫が、アルカの顔を覆った。

古傷を突き破った何かが顔から這い出す。それは赤く染まり、無数の足を蠢かしていた。

湿った音を立てながら、アルカの体が床に倒れ込んだ。顔の下には血溜まりが広がっていた。

『——奴らが群がってくるのは私と、聞いたな？』

異形は“それしか表情を知らないような”笑みを浮かべ、
『確かに、奴らが群がるのは私にだが——私ではない。＜私＞に群がっているのだ』

「……今の蟲が、貴様の本体か？」

『いや……あれは只の蟲だ。戦う術を知らぬ“命じられた蟲”。あの蟲が＜私＞を只の人に使っていたのだ』

ゆっくりと、アルカが体を起こす。

その表情は、今にも泣き出しそうであった。

「命令したはずだ……」

アルカの声が唐突に、泣き出しそうなソレに変わる。

「この城を、町を、領民を守れと命じたはずだ……」

嗚咽混じりに、言葉を続ける。

「私”を……“只の子供のまま”にしておけと命じたはずだ!!”泣き叫ぶアルカの輪郭が、ぼやける。

出血により白くなっていた肌が黒く染まり、幼さを示すような大きな瞳が紅く染まった。

『この役立たずが！　＜私＞が命じたんだぞ！　貴様に！　私のくせに、＜私＞に逆らう気か!!”』

その姿は、先ほどまで戦っていた異形の姿そのものだった。

「妙だと思っていた」

変質した。というよりは、本来の姿に戻ったアルカを見ながら、バージルは首に向かって話しかけた。

「この町に僅かに残っていた人間の中で、奴だけが“混ざっていた”」

首が、それを聞いて首を傾げるような素振りをする。首しかないので、体勢を崩したようにしか見えなかった。

『なら何故……彼を守っていた？』

「利用できるかと思っていたが……大した役にはたたなかった」
『それだけか？』

「——奴だけは、人とも魔ともわからなかった」

目の前で泣き声のような、怒声のような声を上げるアルカに視線をやりつつ、首はバージルの疑問に答えた。

『使徒は、人間が生贄を捧げること<魔>をその身に宿した存在だ。お前には人と使徒を区別する術があるようだが、始めから魔が住み着いているココでは、かえって見分けがつかなかったのかも知れぬな』

先ほどまで敵対していた筈の異形が、まるで争う理由を失ったかのように、バージルとの会話を始める。

何時しか、アルカの元に拷問部屋に住み着いていた蟲が集まり始めていた。それらは一匹、また一匹と変質したアルカに身体に“融合”し、その体躯を大きくさせていた。

『貴様が私の首をはねたおかげで、<私>の身が危険に晒されたと思った“下位の蟲”が<私>に群がっていく。下手をすれば、領民たちとも合流するだろう。——蒼い剣士よ』

不意に、異形がバージルを呼ぶ。

『<私>——アルカを“殺す”手助けをしてほしい。そうすれば、魔女も、スパイダも、知っている限りのことを話そう』

「どういう心境の変化だ」

視線をアルカから外さずに問い返す。アルカは蟲を吸収して、バージルと同じくらいの背丈へと体躯を肥大化させていた。

『私では、<私>を殺すことができない。私以外の力が必要なのだ』

「貴様の言う<私>を殺して、何の得がある」

『……………』

「——いいだろう。だが、肝に銘じておけ」

沈黙が続ける異形に、バージルは閻魔刀を握り直した。なんにしても、何時死ぬか分からない異形を切り刻み続けるのにも飽きてきていた。

「奴を殺せば貴様は、俺に従う以外の道が無いということをな」

全ての蟲をその身に宿したアルカは、腕だけを伸ばす。それはまるで砲弾のような勢いで、壁に縫い付けられた異形の身体に突き刺

さった。

『やり直しだ……』

嗚咽交じりに、異形と化したアルカが呟く。身体に突き刺さった腕が脈動し、肉を取り込んだ。

『始めから、やり直し……いつか、きっと……救われる日が来るまで……何度でも……そのために……』

首だけになった異形を除いて、拷問室にいた異形が全て、アルカに取り込まれた。その体躯は何時しか、先ほどの巨蜘蛛を更に肥大化させたような姿に変わっていた。

『全て……飲み込んでやろう!!』

無数の剣蟲を周囲に射出したアルカが、バージルを、異形を睨み付けた。

第十話 落城

バージルが異形にしたように、異形と化したアルカの“剣のように変化した蟲”の雨が一人と首に降り注ぐ。

その雨に挑むように、魔術を用いた《転移》を行うことで《剣蟲》を通過する。『剣蟲』は残ったバージルの残像を斬り裂きながら石畳に根本まで突き刺さった。

《転移》によって一気にアルカの側まで距離を縮めると同時に居合いを放つ。

《巨蜘蛛》の数倍以上の体躯をもつアルカだが、反応も《巨蜘蛛》のソレと大差がなく、容易に閻魔刀はアルカの剣と化した腕を斬り裂いた。

『ギャアアッ!?!』

叫び声を上げながら、アルカは残った腕をボコボコと変形させ、長大に、凶悪になった腕を宙にいたバージルに叩きつける。

「……………!」

逃げ場の無いバージルは閻魔刀で剣を受け止めるが、衝撃を殺しきれずに石畳に墜落するように荒々しく着地をした。

『邪魔だ……邪魔だ……!』

アルカの切り取られた腕が瞬く間に生え揃う。腕を切り落とそうが、腹を裂かれようが、巨体が故に対してダメージを与えられないようだ。

対して。

「……………」

声にすら出さないが、バージルは今の一撃で自身の体から夥しい量の血が流れ出しているのを感じていた。

異形との戦闘から——それよりも前、正確に言えば『この世界』に落ちた直後に付けた『傷』が彼を蝕み続けていた。先ほどの一撃も、本来ならば胴体を切り離せるはずのモノであったが、体に力

が入らず、腕を一つ切り落とすだけに止まっていた。

ブラリと下げた右の袖口からポタポタと、赤い血が流れ落ちる。度重なる戦闘によって、バージルの体に刻まれた『幽体の傷』が開いたのだ。体はスランとの戦闘の直後と同じように傷だらけになり、口の中で錆の味がした。

『うん……？ 私は何処に行った！？』

アルカが周囲を見渡して首となった異形を探す。いつしか、異形はその姿を消していた。

『私のくせに……《私》の一部になることすら拒むのか！ 何処に行った！！』

「——舐められたものだ」

腕を振り、流れ落ちる血を振り払う。

同時に幻影剣を周囲に設置する。

数にして四つ。

それはバージルを中心に高速で回転を始め、回転鋸のように彼を守る。

背後から飛びかかろうとしていた——切り落とされた腕が変化した蟲がその煽りを受けて寸断される。そのまま蟲はバージルの流した血溜まりへと落ちて音を立てた。

閻魔刀を手にも、駆ける。

視線を外したアルカの体の下に潜り込み、無数に生えた足を視界に納めた。

高速で回転する幻影剣が、閻魔刀の鋭い刃が、胴体から生える足を全て斬り裂いた。

『ギャアアアアアアアアッ！？』

足を失ったアルカが地に落ち、その巨体を揺すった。

「自身が生み出した配下に裏切られて、戦うことすら出来ないか？」

『黙れ！ 黙れ黙れエ！！』

次々に足を生やし、再び上体を持ち上げるアルカは叫んだ。

『従わない奴なんていらない！ そんな奴は、ココに存在しちゃイ

けないんだ!!』

子供のように、アルカは叫ぶ。

痛みの感覚はあるようだが、腕をいくら斬り裂こうと、胴を割ったとしても、桁外れの再生力が生半可な攻撃は全て無効化してしまうようだった。

(持久戦ではこちらが不利か……)

身に宿る『悪魔の血』を解放すれば状況を打開できるかもしれないが、それは『傷つけられた幽体』になるのと同義であった。しくじれば、形勢はこちらに不利に傾くだろう。

(……面倒な相手だ)

内心で吐き捨てる。

口に出す必要もなければ、伝える必要すらないからだ。言葉が力をもって敵を倒すなどと、バージルは思っていない。“力がなければ全てが無意味だと十分に理解していた”。

故に、敵を睨む。

閻魔刀を握りしめる。

全てを斬り裂く決意と共に。

『邪魔だ……邪魔だ……邪魔だあッ!!』

アルカの体が更に膨張を始める。蜘蛛のように生えた足のそれぞれが三つに割れ、胴体からは新たな腕が生え揃った。

『消え失せろオッ!!』

さながら百足のように姿を変えたアルカはバージルへと襲いかかった。

○○○○○○

アルカとバージルが戦鬪を繰り広げている頃。

彼らが訪れていた書斎の扉が軋む音を立てて開かれる。

モゾリ。

と、小さな足を蠢かせて首だけとなった異形が書斎へと足を踏み入れた。

『……………』

無言のまま、異形は体を――首を机の上へと跳ね上げる。単眼をギョロつかせて幾重にも並ぶ本を眺める。その動きはある一冊の本で止まった。何の変哲もない、分厚い本だった。

『――あの剣士は見落としていたか』

言葉を吐き終わると同時に、《首》の単眼が盛り上がり、木製の机の上に落ちる。

眼球は羽と細く長い足を生やし、その小さな体を持ち上げると本へと飛び立った。

足を伸ばして掴みとった本を机の上、首の前まで持ってくる、

《目》は再び首の一部となる。

『……もう、失うことが出来ない』

決意と共に、本を開く。

開かれた本には文字は書かれていない。

分厚い本の中は四角く切り抜いた空間があった。拳が丸々と収まる大きさの空間には、あるものが収まっている。

異形は小さな足を伸ばしてそれを目の前に翳した。

それは――人の顔を模した結晶だった。

目を閉じ、叫ぶように口を開けたソレは水晶のように僅かに光を通している。大きさは人の拳ほどあるだろうか。赤い、紅い、卵のような代物だった。

そしてもう一つ、卵のような代物が収まっている。

結晶と同じように人の顔を模した“石”のような代物だ。違うの

は、結晶が人の顔を再現しているのに対して、石は、目や口、鼻が乱雑に配置された代物で、結晶とは違って輝くこともない。

『——いや、失うものなど、とうに“失ってしまった”か』

異形は悟ったかのように、躊躇うことなく、紅い結晶を大きな口で飲み込んだ。

変化は劇的だった。

『ギ……アッ!?!』

苦悶の声が漏れると同時に、首がハチキレンばかりに膨張する。膨張は止まらず、切断された首からも肉が溢れ出した。それは濁流のように溢れ、形を変える。

『グ……ギャ……!?!?』

体の造りを無理矢理変えるような現象に、激痛が走る。しかし、どんな激痛も、異形にとっては取るに足らないモノだった。

『死の恐怖——そんなものは、とうに失ってしまった』

体中を突き刺されるような痛みがかえって心地よくすら感じられる。体を刻まれようと、目玉を潰されようと、異形には『死の恐怖』というものを感じさせる要因にはならない。

《首》だけであった異形のシルエットが変わる。

二本の腕と足。そして体から生える頭。何時しか、異形は体を取り戻していた。

だが、それは影のようなノッペリとしたモノではなかった。

人と同じ二つの目、そして額を縦に割るように開かれた紅い瞳が覗いていた。ガッシリとした体躯に羽が生えている。

それはバージルが書斎で見つけた本の挿し絵と“瓜二つ”だった。『……やはり、“適応”するか。——当然と言えば、当然か。“そう生み出されているのだから”』

何かを確かめるように、三つ目の前で拳を握りしめる。

体から溢れ出す力——結晶から得られた膨大な魔力が、異形の姿

を『スパイダ』の姿へと変えていた。

『——そうか』

体から溢れる『力』を感じて、思考の隅に引っかかっていた疑問が解ける。それはある人物と出会ったときから感じていた力——この力ととても似通った力を、ある人物からも感じていたのだ。

『あの蒼い剣士——“魔の血族”か』

くぐもった笑い声を上げながら、異形は笑った。今までの不自然なものではなく、ごく自然なもののように思えた。

『久しぶりに……心から笑える。なんと、懐かしいことか……』
笑い声が、書斎に響いた。

不意に、書斎のドアが開け放たれる。

そこには、城を守っていた兵士を“くわえた”領民の姿があった。兵士の頭は失われ、ズルズルと甲冑を纏った足を引きずっている。

領民が異形の姿を見つけると、一層笑みを深くしながら歩み寄ろうと足を踏み出し——通路の壁に叩きつけられた。

『ここまで入り込んできたか』

異形の剣と化した腕は、兵士の亡骸と共に領民を貫いていた。開かれた間合いを一気に詰め寄り放たれた一撃に、領民は悲鳴を上げる。

『あの剣士にはしてもらわなければならないことがある。それまで——邪魔をしてもらっては困るのだ』

ドロリと、スパイダの姿がぼやける。やがて、異形は人形へと姿を戻した。

その異形の大きな口が裂ける。顔の殆どが口のようになった異形は蛇のように口を開き、ギラついた牙を領民に見せつけ、

『我が一部となり、大人しくしている』

悲鳴を上げ続ける領民にかぶりついた。

○○○○○○

剣となった無数の足が、地面を風ぐように拷問部屋の石畳を碎きながらバージルに迫る。剣の形を取らずとも、ふれれば肉体が弾き飛ばされてもオカシくない程の速度である。

バージルは避けることも、受け止めることもせず、閻魔刀を抜いた。幾重に束ねられたアルカの剣足と刃が交差する。

剣足が鮮血をまき散らしながら宙を舞う。勢いのついたアルカの体は床を滑り、上体をバージルの前へと横たえた。

『痛い……痛い……なんで……こんな……』

悲鳴混じりに、バージルの視線より低い位置からアルカが叫ぶ。

泣き言を漏らしながらも、新たな足が生えかかっていた。異形と同様に——あるいはそれ以上の再生能力だ。いくら足を切り裂こうと、対して感じてはいないようだ。

既に何度同じことをしただろうか。

あちらこちらをそぎ落とし、その都度再生して殺し合う。

『私は……ただ……やり直したくて……』

「わめくな」

鞘をアルカの口にねじ込んで口を塞ぐ。ひきつった声が漏れた。

「泣き叫ぶ暇があるなら、さっさと自害でもするがいい。何度挑もうが、貴様では俺には勝てん」

尋常ではない再生力を誇るアルカではあるが、戦闘に関しては先ほど戦った異形の方が遙かに優秀であった。異形が技で対抗しようとするのに対して、アルカはただの力押し。ただの人間ならばそれだけで脅威ではあるが、バージルには恐ろしく鈍い。

明らかに、力を持て余していた。

アルカは肩から《劍蟲》を射出する。弾丸のように迫るそれを、バージルは僅かに顔を逸らしただけで避けた。拍子に鞘が外れ、アルカが跳ね起きる。既に足は生えそろっていた。

『……諦めきれない……こんな……こんなものを求めているんじゃない』

ない!』

「いいかげん、飽きてきた」

終わりにしようと、閻魔刀の鯉口を切ろうとして——目の前が暗くなる。同時に、足下がフラツいた。

（——血を失いすぎたか!?!）

以前からは想像もできないほどに衰弱したバージルは、ごく僅かな間だけ敵を見失った。

それは、致命的な隙であった。

目眩が収まると同時に、目の前には束ねられたアルカの足が迫っていた。

「ぐ……!」

受け身もとれず、バージルは血で汚れた壁に叩きつけられる。衝撃で城が揺れたとさえ思えた。

立て直そうと視線をあげると同時に——アルカの巨大な剣の足が胸を貫いた。

叩きつけられた壁に、バージルが縫いつけられる。

『死んで……そのまま……終わって……!』

アルカがバージルに突き立てた足を捻る。バージルが大きな血の固まりを吐き出した。

（……こんな弱者に——）

閻魔刀を握る手から力が抜ける。

殺意をむき出しにした視線が下がる。

視界が暗く、何も見えなくなる。

『ああ、これで……やり直せる』

アルカの声だけが、彼の耳に届いていた。

（終わるのか……ここで）

薄れゆく意識の中、バージルは自嘲した。スパイダの力を求めて双子の弟と斬り結び、敗れ、魔界へたどり着くことも出来ずに死に

瀕している。

《立てよ。あんたの力はそんなもんじゃない》

この世界に来る直前。腹を斬り裂かれた折りに書けられたダンテの言葉が脳裏をよぎる。

閻魔刀を握る手に力が戻る。

『お前も産みなおしてやる。“新たな領民”として、民に加わるがいい』

あんどりと、アルカが大きな口を開いてバージルに覆い被さる。

シャリン。

と、鞘鳴りが響いた。

『——あ』

呆然とした声が、開かれた口から漏れた。

その巨大な単眼は、バージルに突き刺さって足に注がれている。足は根本から先が“なくなっていた”。

「覚えておくがいい」

拔身の閻魔刀を手に、バージルは胸に突き刺さった足を無造作に引き抜く。穿たれた穴からは大量の血が溢れだした。

「力こそが全てを制する」

閻魔刀を鞘に納め、構える。

「力なくては何も守れはしない」

バージルの体がぼんやりと蒼い魔力を纏う。力強い双眸が赤く光った。

『ひッ——』

アルカにはそれが、“人ではない何か”に見えた。

キンッ、と拷問部屋に金属音が響きわたる。バージルは引き抜かれた閻魔刀を手にアルカを見据え——後ろを向いた。

『——何を……』

自身には何の被害もないことに気づいたアルカが背後を見せたバ

ージルに向かって距離をつめようとして、

「——自分の身さえもな」

振り返ることなく、バージルは鞘から迎えるように閻魔刀を鞘に納めた。

轟音が響く。

アルカの上に、何かが落ちた。

『ガッ！？』

衝撃を殺しきれずに床にたたきつけられる。

『何が……！』

身を捻ったアルカの上には巨大な石片がのしかかり、体を押しつぶしていた。

「虫は潰すに限る」

『キサマ……キサマアッ！！』

伸ばした手の上に巨大な石が落ち、肉がズタズタにちぎれる。痛みの悲鳴を上げる前に、鋭く尖った瓦礫が胴体に突き刺さった。

『イヤだ……こんな、こんな終わり方——』

通路へと続く扉の残骸に歩を進めるバージルの姿をみるアルカの上に“斬り裂かれた城の残骸”が降り注いだ。

第十話 落城（後書き）

次回で牢獄の城編は終わる予定です。アルカの動機や異形の存在の秘密など、いくらか張った伏線を回収していきます。

感想、ご指摘などがありましたらお気軽にお書き下さい。

第十一話 異形

随分と昔。

切り立った崖を背後に建てられた城を中心とした城下町には活気があった。

海の近くではあるが高い崖のせいで下には降りられないために魚はとれず、商店には野山で穫れた動物や畑の野菜が売買されている。他にはいくつかの特産と呼ばれるようなモノがあったが有名ではなかった。

そんな町が賑わっていた理由の一つに、低い税率がある。城に住む領主は近隣の領主たちとは違い、必要最低限の税しか求めなかった。そのため、行商にあまり適さない土地であるにも関わらずに多くの商人達が町の訪れていた。

国境でもないために戦争に巻き込まれて略奪の標的にされることもなかったこの土地は、領民にとっては住みやすい場所であった。

その土地を納める領主は余程の人格者であろうと噂されるのは至極当然でもあった。

領主の名はアルカ・アイロラ。皺が徐々に目立つようになった彼には妻と一人娘がいた。

○○○○○○○

人であった頃。つい最近のような、はるか昔のことのようにさえ思える。と、異形は瞳を無くして口だけとなった顔の内側で思いを巡らせた。

月日を数えるようなことはしなかった。苦しんだ数を数えるよう

で、苦痛でしかなかったのだ。

——何故、戦う。

異形は蜘蛛のように変質した領民を切り裂き、思う。

——何故、救われない。

横合いから襲い掛かるもう一体の爪が身体に深々と突き刺さり、血があふれる。呻きながら、異形は目の前にあった蜘蛛の首根つこに噛み付き、複眼だらけの頭を抱え込んで首をへし折る。勢いがついた蜘蛛はグルグルを身体を捻らせながら地面を転がった。乱暴に引き抜かれた蜘蛛の足が異形の身体を大きく裂く。

何故——狂ってしまったえない。

影のような身体を血に濡らし、口元に残った蜘蛛の肉を咀嚼しながら思うのはそれらの疑問のみ。いつしか、それらの疑問さえも、闘争の中で霞のように消え失せる。

切り裂き、叩き、喰らう。その行為の単純さ。快樂にすら覚える戦闘の渦に中にいる時にはソレ以外の事柄を考えずにすむ。

肉を飲み込む頃には、傷ついた身体はいつもの黒く染まった身体に戻っていた。裂かれた傷など、まるで忘れてしまったかのように。

異形が戦闘——捕食と言い換えてもいい——を止めたのは、不意に響いた音によるものだった。

『城が……』

いつしか城門へとたどり着いた異形が轟音に反応して城を見上げる。見る——という意思を感じ取り出現した単眼は、塔の一部が大きく崩れていくのを映した。バージルとアルカが戦闘を繰り広げている拷問部屋がある場所だ。

『終わったのか』

確信めいたものを感じながら異形は呟いた。剣と化した右腕からは血が滴り、もう一方には首から上がない《領民》の遺体に爪が突き立てられている。周囲には肉片が転がり、僅かにビクビクと痙攣を繰り返していた。

『——こちらでも丁度よく狩り終わった』

アルカの元へと向かう領民の大半を斬り裂き、或いは喰らった異形は、死体を投げ捨てると城へと歩みを進める。

不意に、夜明けの陽射しを遮った何かが、異形の目の前に落ちた。風に乗って飛んできたであろうボロボロの布地であるそれは、アルカの着込んでいた外套であった。理解できたのは、異形だけであったが。異形はそれを拾い上げしばし思案すると、土と僅かな血痕が付着したそれを脇に抱え、城へと続く道へと入っていった。

○○○○○○

崩壊した拷問部屋跡。

瓦礫が床を埋め尽くし、崩れた天井からは輝く太陽がのぞいている。その瓦礫の山の一つに、バージルは地面に突き立てた閻魔刀を抱えるようにして腰を下ろしていた。

たった一匹狩るのに、何という様だ。

バージルは伏せられた瞳の奥で己を叱咤する。再生能力があるだけの雑魚に手こずるなど、以前——恐怖によって悪魔を自らの駒と利用してた時——の彼からは考えられなかった。

「——力だ」

より強力な。より凶悪な。絶対的な力が必要だ。

魔女の力がある。と、バージルは改めて目的を再確認した。不確かな情報であることは重々承知であったが、バージルには他の選択肢など残っていない。力を取り戻し、新たな力を得る以外の方法など選ぶはずがなかった。

『力など、手に入れたところで満たされぬ』

バージルの決意に、瓦礫を持ち上げるようにして現れた異形が答えた。姿を消した直後の首だけの姿とは違い、五体満足の姿である。

『渴望は即ち、飢え。自らが干からびるまで、けして潤うことはない』

退かした瓦礫——成人男性が四人ほど集まって持ち上がるかどうかの大きさのソレを、異形は埃でも払うかのように投げ捨てる。積み重なり山になっている破片を碎きながら、瓦礫は音を立てて落ちた。

『とは言え——求めることを止めることなど出来るはずもないがな』
「貴様のような不完全な存在と一緒にするな」

一瞥し、バージルは見下すように言う。

『確かに、私は完全とはいいがたい。人にも、魔にも成り切れぬ』
異形は自重するように呟き、残骸の山——アルカが埋もれた瓦礫——に目を向ける。

脇に抱えていたボロ布のようなものを体に納め——何度見ても異様な光景だった——視線を外さず歩み寄ると、巨大な破片に手をかけた。

『ぬう……！』

先ほど持ち上げた瓦礫に対し、山のような破片は僅かに動く様子を見せない。そうでなければ、アルカが易々とつぶれる筈もないのだから当然と言えば当然であった。

『——ッ！』

それでも。異形は更に力を込める。

声が漏れぬほどに噛みしめられた牙が剥き出しになり、腕の瘤がハチキレンばかりに盛り上がる。

不意に、バージルは異形から視線をはずし、瓦礫を退かして開かれた穴に移した。

月明かりの届かぬ暗がり無数の蟲がはいだしていた。城に火を灯していた油虫のような虫や、剣のような体をもつ《剣蟲》が穴から溢れ、異形に群がっていく。

蟲たちは異形に触れると、水面に落ちる滴のように溶けていく。次々に続く蟲の列は終わらず、穴と異形が黒い糸で繋がれた。呼応

するように、異形の体が膨れ上がる。空気で膨らむ風船のようではなく、麻袋に砂が満ちるように密度が高まり、それでも抑え切れぬ圧力がその体を押し広げている。

『ガアアッ!!』

線が途切れると同時に、異形が吠えた。重力の法則を忘れた破片が宙を舞う。たっぷりと空を飛ぶ自由を味わった瓦礫は地面に引かれる力によって捕らえられ、隣の塔を碎いて止まった。

瓦礫の下から現れたのは黒い泥のような塊だった。水たまりと言うよりは池に近い血の海に、ポツンと存在するそれが何であったか、それだけで判断など出来ないであっただろう。

——嫌だ。

声が、肉塊からコボれた。

——忘れられたのに。やり直せたのに。

『許されないことだった』

肉を振るわせて声を発するアルカのなれの果てに異形が答える。

諭すような声色にも聞こえた。

——私は、間違っていたのか？

『答えは私が引き継ごう。私はお前であり、お前もまた私だ。求める答えは同じ筈』

僅かに背丈が伸びた異形はそれをつまみ上げ、一つしかない瞳にかざす。肉片が僅かに動いている。まるで、その手から逃れようともがいているようだった。

——嫌だ。繰り返すぞ。またアレを。

『既にこの体は適応している。今の私——《私たち》なら自我を忘れることもないだろう。少なくとも、この城に留まるよりはマシな選択だ。それに——もう試した』

肉塊が大きくふるえる。

——お前、《血晶》を……

『失った体を取り戻すのにもっとも手っとり早い方法だった。そのまま爆ぜることも期待したが、どうやら許されぬようだ』

——嫌だ。嫌だ。嫌だ。

『永久に、身を任せるがいい』

パカリと開いた口に、黒い滴が飲み込まれた。

異形の表情はいつものような笑み——それ以外の表情というものを見たことがない——が浮かんでいた。

『間違いを正す……人の手を借りてようやくだ。体を分けても自分を見つめることすら叶わないというのに。笑える』

意味深な、それでいて当事者以外には意味不明な言動を一通り行った異形は振り返り、

『望みを聞こう。私がやるべきであった“一つ”を行えた対価だ』

バージルは立ち上がり、異形をにらむ。僅かにふらついたように見たのは気のせいではないのだろう。だがその眼差しには、一切の揺らぎがない。

「話せ」

端的に、有無を言わず、バージルは問う。異形は興味深そうにバージルを見つめた。

『ここでは説明するのに不便だ。場所を移そう』

異形はそばに落ちていたアルカの持っていた古書——奇跡的に瓦礫に埋もれることはなかったようだった——を拾い上げると、来た道——床に開いた穴のような場所に身を沈める。バージルもそれに続いた。

異形が先導してたどり着いたのは、バージルがスパイダの描かれた本を見つけた書斎であった。先ほどの戦闘の影響か、壁一面に並べられていた本が今は床に散乱している。

『千年ほど昔の事だ』

異形は黒く染まった手で床に広がった古書の一つを手取る。

『当時、この大陸は小さな都市国家や多くの民族、部族が争う時代にあった。長引く戦^{つぐく}に土地は荒れ、それに伴う食糧難、疫病によって、全人口の三分の一が死に絶えた。もっとも、今もさして代わり

はない。世は戦乱に明け暮れている』

バージルの反応は淡泊なものだった。異形はそれを見て話を進める。

『その時代——戦乱の時代が終わらせた存在が覇王ガイゼリック。スパイダに関わりがあるとされる人物だ。生まれ、出身、拳兵の経緯に至るまで、歴史の表舞台に現れる依然の事は文献には何一つ記されていない。覇王と呼ばれたのは——史上唯一、この大陸全土を支配する大帝國を一代で打ち立てたからだ』

ただの一代で、多数の勢力が荒そう中、國を支配するというのはどれほどの事だろうか。ガイゼリックには過剰とも思われる覇王という異名を呼ばれるだけの理由があったようだ。

『ガイゼリックは民に重労働を強いて巨大な都を築き、重税をかして都は酒池肉林のるつぼと化したという。その所行を見かねた——ここからは特に信憑性に乏しいが——神が、四人、ないしは五人の《天使》を遣わし、都を雷と大地震によって一夜の内に地上から消し去ったのだそうだ。天変地異によって地中に没した都は、日の光にも、風にも晒されずに未だにミッドランドの地下深く眠っているという』

言葉をきり、異形はバージルを見据えた。

『その都は《國の中央の地》という意味で《ミッドランド》と名付けられた……この物語は國名の由来として伝えられていたものだ』

「御託はいらん」

長々と続いた異形の話に求めている答えが無く、バージルは苛立ちを隠そうともしなかった。

『——ここからは秘匿された物語の続きだ』

パラパラと本をめくっていた異形の手が止まり、グリグリと単眼がバージルを見つめた。

『都が地中深くに没した時、その穿たれた巨大な穴から無数の《化け物》が地上へと現れた。人はそれを《悪魔》と呼んだ』

バージルに見せるように、異形は本を広げた。

『化け物は人々を襲った。犯し、殺し、喰らい、暴虐の限りを尽くした。その時だ。『スパイダ』と呼ばれる存在が現れたのは』
広げられた本に描かれた挿し絵にはバージルが異形に見せた剣を振るう存在——スパイダが描かれていた。

第十一話 異形（後書き）

リハビリに近い作業を繰り返して書き上げました。間が空くとつらいものです。

結局一話に収まらないのもう少し続きます。

蛇足ですが、ベルセルク映画化おめでとう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0187m/>

Devil May Cry ～蒼い悪魔と狂戦士～

2011年7月19日03時44分発行